外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書22

高 畑 遺 跡

－第19次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第799集

2004

福岡市教育委員会

外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書22

高畑（たかばたけ）遺跡

－第19次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第799集

遺 跡 略 号　TKB－19
遺跡調査番号　０２６１

２００４

福岡市教育委員会

序

西日本屈指の都市として今も発展を続ける福岡市は、古くより大陸文化の受け入れ口の役目を果たし、豊富な文化財が今なお地下に眠る街でもあります。都市の発展と埋蔵文化財の保護は相容れないことが常ですが、両者が共存する歴史豊かな住みよい街づくりを心がけ、これを子供たちに伝えていくことが現代を生きる我々のつとめであると言えましょう。

福岡市教育委員会では、埋蔵文化財を保護・保存するとともに、やむなく開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。本書は道路建設にともなって実施した高畑遺跡第 19 次調査について報告するものです。調査では古墳時代の集落跡などを確認することができました。

調査に関られた関係者の方々に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用され、文化財保護の理解を深める一助とならんことを願います。

平成 16 年 3 月 12 日

福岡市教育委員会

教育長　生田征生

例　　言

1．本書は平成15年（2003）1月21日から2月28日に福岡市教育委員会が行った、博多区板付6丁目地内所在の高畑遺跡第19次発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は福岡外環状道路及び都市高速5号線建設工事に伴う受託調査として行った。

3．本書に使用した遺構実測図の作製は、吉武　学、桑野愛子（福岡大学）が行った。

4．本書に使用した遺物実測図の作製は、田中克子が行った。

5．本書に使用した写真の撮影は、吉武が行った。

6．本書に使用した図の製図は、田中が行った。

7．本書に使用した方位は全て磁北である。

8．本書の執筆と編集は、吉武が行った。

9．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺跡調査番号	０２６１		遺跡略号	ＴＫＢ－１９	
調査地地籍	博多区板付６丁目地内		分布地図番号	２４　板付　００９５	
開発面積	－	調査対象面積	４００㎡	調査面積	２０４㎡
調査期間	2003年（平成15年）１月21日～２月28日				

本　文　目　次

第一章　はじめに …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
　3．調査地点の位置と既往の調査 …… 2
第二章　発掘調査の記録 …… 6
　1．発掘調査の方法と経過 …… 6
　2．基本層序 …… 6
　3．発掘調査の概要 …… 6
　4．Ⅰ区の検出遺構と出土遺物 …… 7
　　(1) 溝 …… 7
　　SD－001 …… 7
　　SD－003 ・ 004 …… 7
　　(2) その他の遺物 …… 9
　5．Ⅱ区の検出遺構と出土遺物 …… 10
　　(1) 竪穴住居跡 …… 10
　　SC－011 …… 10
　　SC－032 …… 12
　　(2) 溝 …… 12
　　SD－030 …… 12
　　(3) 井戸 …… 19
　　SE－029 …… 19
　　(4) 土坑 …… 20
　　SK－013 …… 20
　　SK－020 …… 22
　　(5) 包含層 …… 23
　　SX－012 …… 23
第三章　おわりに …… 30

挿　図　目　次

Fig. 1　高畑遺跡第 1 ～ 19 次調査地点の位置（1/4,000）…… 3
Fig. 2　第 19 次調査区の位置（1/1,000）…… 4
Fig. 3　第 19 次調査区の遺構配置（1/200）…… 5
Fig. 4　SD－001（1/40）…… 7
Fig. 5　SD－001 出土遺物（1/3）…… 8
Fig. 6　SD－003 ・ 004（1/40）…… 9
Fig. 7　SD－003 ・ 004 出土遺物（1/3）…… 9
Fig. 8　Ⅰ区出土のその他の遺物（1/3）…… 9
Fig. 9　SC－011 ・ 032（1/40）……10
Fig.10　SC－011 ・ 032 出土遺物（21 は 1/2、他は 1/3）……11
Fig.11　SD－030（1/40）……13
Fig.12　SD－030 出土遺物Ⅰ（1/3）……14
Fig.13　SD－030 出土遺物Ⅱ（1/3）……15
Fig.14　SD－030 出土遺物Ⅲ（1/3）……16
Fig.15　SD－030 出土遺物Ⅳ（1/3）……17
Fig.16　SD－030 出土遺物Ⅴ（92 は 1/2、他は 1/3）……18
Fig.17　SE－029（1/40）……20
Fig.18　SE－029 出土遺物（1/3）……21
Fig.19　SK－013 ・ 020（1/40）……22
Fig.20　SK－013 ・ 020 出土遺物（1/3）……22
Fig.21　SX－012（1/40）……23
Fig.22　SX－012 出土遺物Ⅰ（1/3）……25
Fig.23　SX－012 出土遺物Ⅱ（1/3）……26
Fig.24　SX－012 出土遺物Ⅲ（1/3）……27
Fig.25　SX－012 出土遺物Ⅳ（1/3）……28
Fig.26　SX－012 出土遺物Ⅴ（191 ～ 194 は 1/2、他は 1/3）……29

図　版　目　次

PL.1　1．第19次調査区全景（手前がⅠ区、北東から）
2．Ⅰ区全景（北東から）
PL.2　1．Ⅰ区全景（南西から）
2．SD－001（北西から）
PL.3　1．SD－003・004（西から）
2．SD－004（北西から）
PL.4　1．Ⅱ区全景（北東から）
2．Ⅱ区全景（南西から）
PL.5　1．SC－011遺物出土状況（北から）
2．SC－011完掘後（北東から）
PL.6　1．SC－011遺物出土状況（東から）
2．SC－011遺物出土状況（南から）
3．SC－011遺物出土状況（南西から）
4．SC－011遺物出土状況（北西から）
5．SC－011完掘後（北東から）
6．SC－011完掘後（南西から）
PL.7　1．Ⅱ区西端部分（南西から）
2．SE－029・SD－030（北東から）
PL.8　1．SE－029（北西から）
2．SK－020遺物出土状況（北西から）
PL.9　1．SK－013土層断面（北東から）
2．SK－013完掘後（北東から）
PL.10　出土遺物

表　目　次

Tab. 1　高畑遺跡調査一覧 …… 3

第一章　はじめに

1．調査に至る経過

福岡外環状道路は新設国道であると共に、博多区立花寺～西区福重間では都市高速５号線が、更に城南区～早良区では地下鉄路線が重複して建設され、都市圏交通渋滞解消の切り札としての役割が期待されている道路である。福岡市教育委員会ではこの建設にともない、国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所や福岡北九州高速道路公社、福岡市交通局等の委託を受けて、予定地内にある埋蔵文化財の発掘調査を平成３年度から実施してきた。現在この一連の調査もようやく終局を迎え、本年度で全ての報告書が刊行され、事業が終了することとなった。

本書で報告する高畑遺跡第19次調査は、福岡外環状道路に隣接する九州管区警察学校との境界塀の建設予定地に対して実施したものである。道路部分の埋蔵文化財調査は、高畑遺跡第18次調査として平成11年９月１日～平成12年６月28日に行われ、既に調査報告書が刊行済みである。今回の調査地点はこの第18次調査地点の北側に隣接する部分にあたり、道路境界線を中心に建設工事によって破壊を受ける幅3.2mに対して東西に細長く調査を行うこととなった。敷地内では既に都市高速５号線高架建設や歩道橋橋脚建設等の工事が進行中であり、工事工程との兼ね合いもあって非常に制約の多い、かつ危険の伴う調査が予想されたが、関係各機関の協力もあり、予定していた期間内で無事故のうちに調査を終えることができた。

調査は公共受託事業として福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成14年度に行い、同じく資料整理・報告書作成は平成15年度に行った。工事は福岡国道工事事務所の監督下にあるが、上述のように都市高速道路が併設されることから埋蔵文化財調査費は国土交通省と福岡北九州高速道路公社が応分負担しており、今回は後者と委託契約書を締結して調査を実施することとなった。

2．調査の組織

調査にあたり、国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所、並びに施工業者である三軌建設株式会社にご協力を頂いた。感謝申しあげたい。

調査は以下の組織で行った。

調査委託　福岡北九州高速道路公社
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　生田征生
調査総括　埋蔵文化財課長　山崎純男
　　埋蔵文化財課調査第２係長　田中壽夫
調査庶務　文化財整備課管理係　御手洗　清
調査担当　埋蔵文化財課調査第２係　吉武　学
調査協力　桑野愛子（福岡大学）、佐藤俊治、嶋　ヒサ子、清水　明、長田嘉造、西田文子、野口ミヨ、野田淳一、平川正夫、松永重子、宮崎タマ子、持丸玲子、森田祐子、山内　恵、山崎光一（五十音順、敬称略）
整理調査員　田中克子
整理協力　上塘貴代子、下山慎子、萩尾朱美、森　寿恵（五十音順、敬称略）

３．調査地点の位置と既往の調査 Fig. 1 、Tab. 1

高畑遺跡は御笠川と諸岡川に挟まれた細長い洪積低丘陵とその東側沖積地上に主に展開する。周辺には両河川によって形成された低丘陵が島嶼状に連なり、鞍部を挟んで北西側の丘陵には板付遺跡、南東側には麦野Ａ遺跡が展開し、その東側の沖積地上には井相田Ｃ遺跡がある。現在の住居表示では板付４～６丁目に展開する遺跡で、大半を九州管区警察学校の敷地が占めるために大規模開発から守られてきた遺跡とも言えるが、1940年頃には軍需工場建設によって大きく削平され、その際礎石とみられる多くの大石が動かされたと伝える。

高畑遺跡はその地番が示すように、1984年までは板付周辺遺跡として主に宅地造成に伴う国庫補助の調査・報告が重ねられてきたが、同年の第11次調査からは高畑遺跡の名称が使用され、同時に過去の調査にも第１～10次の番号が割り当てられた。今回の調査で計19次を数えるが、その多くは丘陵北～東側の沖積地に対してのもので、丘陵上を対象とする調査は第11次と第18次、そして今回の第19次のみである。これらの調査により、丘陵上は削平と工場建設による破壊が著しいが、丘陵の東西縁辺部の削平を免れた部分には良好に遺構が残っていることが分かった。

高畑遺跡のこれまでの調査については第18次調査報告等に詳しく述べられており、繰り返しになるため全体的なことには触れないが、アウトラインのみを記しておく。

高畑遺跡のこれまでの調査

１．台地東縁部で８次調査が行われ、８～９世紀の溝より木簡や大量の墨書土器、瓦塼が出土した。木簡には米や穀物に関する記載が、墨書土器には郷名などの地名に関する記載や「寺」と記したものがあった。これらの出土遺物や、第９次調査で確認された区画溝とみられる溝、旧地形等の検討、かつて礎石があったという伝承等から、溝の西側に８世紀中葉以前創建の寺院跡が存在する可能性が強まった（市報98集）。一方、祭祀遺物が多く出土すること等から寺院跡ではなく那珂郡衙が移転した可能性もあり（市報458集）、優勢となりつつある（市報676集）。また、この溝が南東に１㎞弱離れた井相田Ｃ遺跡第１次調査検出の大溝と連続する可能性もでてきた（同前）。古代の溝は丘陵北縁部の第４・７・14次調査でも確認しており、古代官衙の区画溝とも考えられるが、いまだ全容は見えない。いずれにせよ、南側や西側の第13・18・19次調査などでも古代の遺物が出土することから、古代の施設は丘陵全域に展開していたものと考えられる。

２．高畑遺跡は、古地図に残る切り通しや歴史地理学的見地、あるいは周辺遺跡調査例から、水城東端の切り通し（推定東門）から博多方面へ直進する官道（水城東門ルート）の通過地点としてかねてより指摘のあった遺跡である。第18次調査Ⅰ区では、中世の水路により破壊されていたものの、上端幅22m、下端幅18mの幅員の古代官道を確認した。８世紀～９世紀初頭、中断を挟んで11世紀後半～12世紀前半に機能した駅路と考えられる。今後はこの南北それぞれの延長上で類似遺構を確認することが課題であろう。また、上記の寺院跡は官道の推定ライン上にその位置が想定されており再考の必要があろう。

３．古代以外の遺構としては、丘陵北縁部や東縁部で弥生時代後期～古墳時代の溝を検出していたが、第18次調査では弥生時代後期末と古墳時代中期を中心とする集落を確認し、この頃一帯に水田開発を伴う集落が進出したことが明らかとなった。

４．古代末から中世にかけて、高畑遺跡周辺は急速に水田化したようである。第17次調査では11世紀後半造営と推定される水田遺構を検出した。

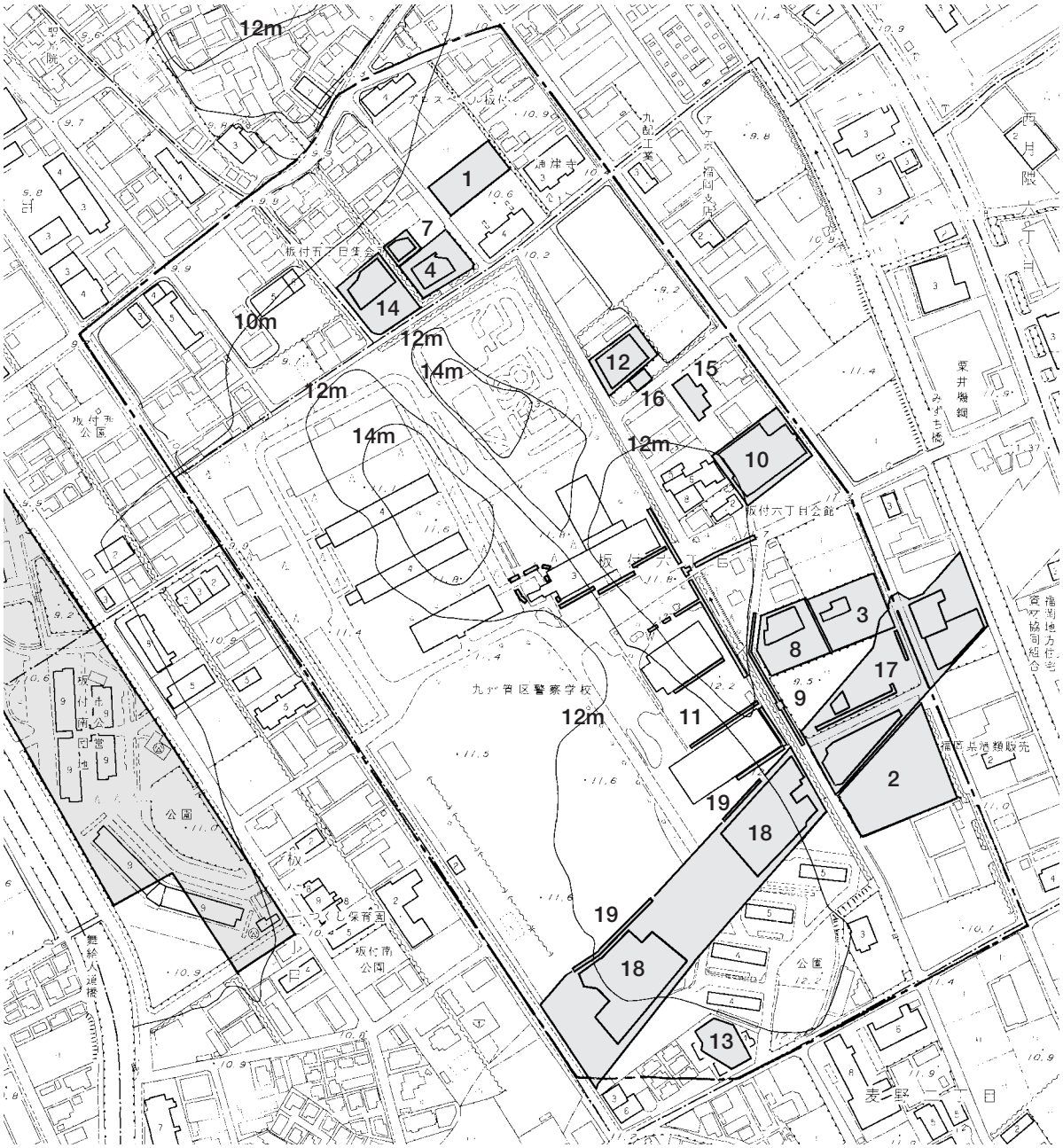


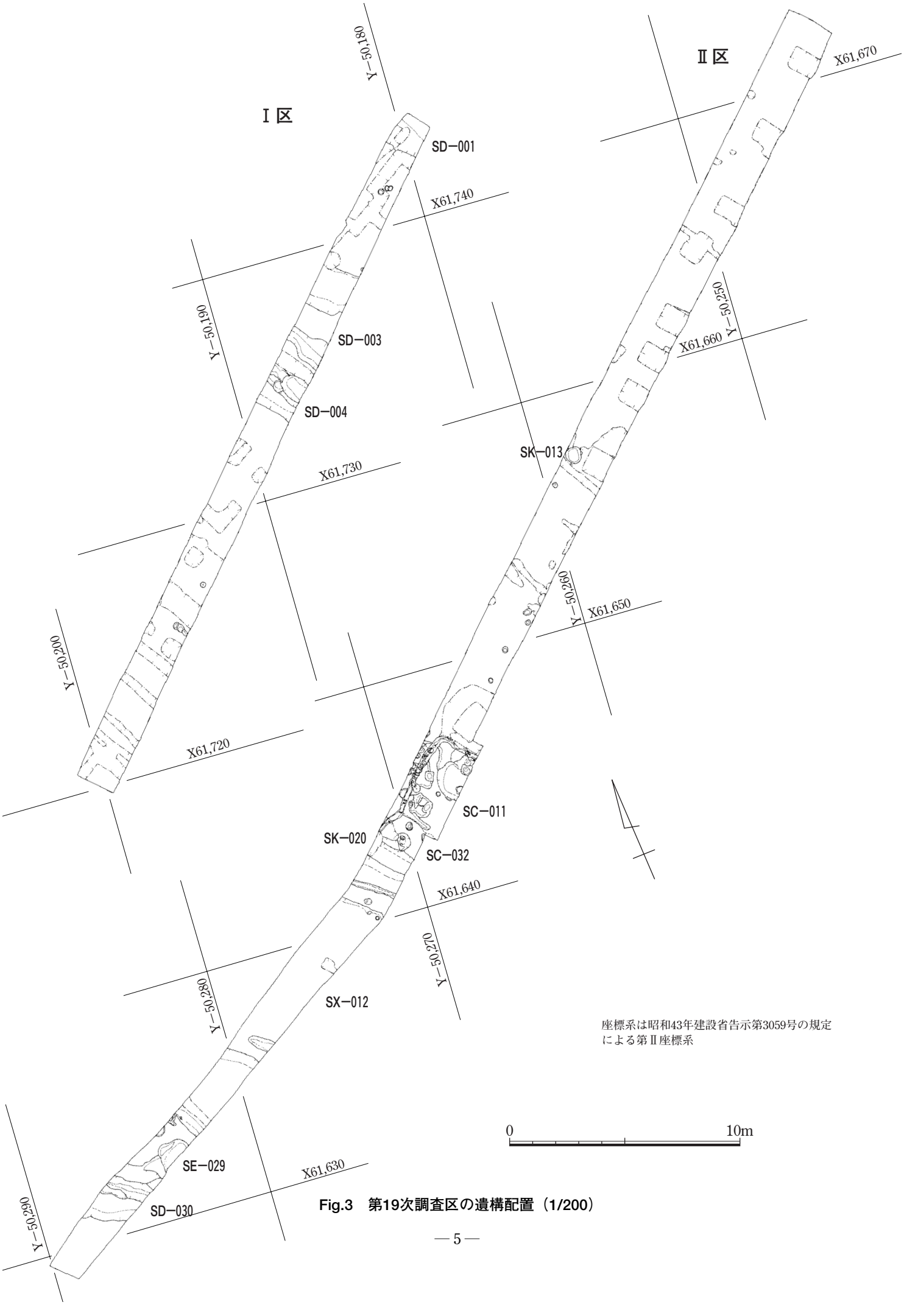
Fig. 1　高畑遺跡第1〜19次調査地点の位置（1/4,000）

等高線は大正末〜昭和初期の地形図から転写

Tab. 1　高畑遺跡調査一覧

次数	調査区	調査番号	調査面積	検出遺構/出土遺物	報告・概要
1	板付　D９・10区	7312	48	旧河川氾濫原/弥生土器	市報29集
2	板付　A・B13区	7313	72	遺構なし/弥生土器・瓦・須恵器・土師器	市報29集
3	板付　B12ａ区	7509	400	土坑、杭列/須恵器、土師器、弥生土器	市報36集
4	板付　D10ａ区	7933	370	土坑、溝（5c、8〜9c)/瓦、須恵器、土師器、木器	市報57集
5				遺構なし	
6				遺構なし	
7	板付　D10ｂ区	8138	180	溝（5c、8〜9c)/須恵器、土師器、木器	市報83集
8	板付　B12ｂ区	8220	330	溝（8〜9c)、土坑、井戸、水田（中世)/須恵器、土師器、瓦、木簡、木器	市報98集
9	板付　B12ｃ区	8221	94	溝（8〜9c)、杭列、土坑/須恵器、土師器、瓦、木器	市報98集
10	板付　B11ａ区	8436	1560	溝（5c、8〜9c)、土坑（13〜14c)/須恵器、土師器、木器	市報115集
11		8441	550	住居（弥生後期、5c)、貯蔵穴（弥生前期)、井戸（弥生後期、奈良)/弥生土器	市報115集
12		8649	600	溝（弥生後期〜古墳初頭、5c)/弥生土器、土師器、須恵器、木器	市報210集
13		8702	480	井戸（弥生後期、古墳前期)、土坑（古墳)/土師器、須恵器、玉類、瓦	年報2
14		9368	593	溝（8〜9c)、旧河川/弥生土器、瓦	市報458集
15		9753	254.5	河川（弥生後期)、溝（古墳前・中期)/弥生土器、土師器	年報12
16		9774	70	溝（4c後半)/弥生土器、土師器、木器	年報12
17		9833	2063.5	大溝(8c前半〜10c)、溝、土坑（縄文、弥生)、水田（11c後半)、河/縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器、木器	市報676集
18		9936	4750	Ⅰ区：古代官道（8〜9c初、11c後半〜12c前半)、貯蔵穴（弥生前〜中期)、住居(弥生中期、古墳前期)、溝（中世)/弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦 ⅡⅢ区：住居（弥生後期〜古墳後期)、掘立柱建物、井戸、土坑、溝/弥生土器、土師器、須恵器、陶質土器、玉類	市報699集
19		0261	204	溝(弥生末、中世)、住居・井戸・土坑(5c)/弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器	本　書

Fig.2　第19次調査区の位置（1/1,000）



座標系は昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系

Fig.3　第19次調査区の遺構配置（1/200）

第二章　発掘調査の記録

１．発掘調査の方法と経過　Fig. 2

調査予定地は丘陵を東西に横断するものであるが、丘陵上は削平により遺構が存在しないため、東西の斜面部分が調査対象となった。

第18次調査に準じ、東からⅠ区、Ⅱ区とした。予定では幅3.2mを調査範囲としたが、仮設塀の支柱などのため引きをとり、結局幅2.0～2.3mで、長さはⅠ区が33.1m、Ⅱ区が64mの調査区となった。第18次調査ではⅠ区東側で古代官道を確認しており、今回もこれの調査が主眼となると期待されたが、遺構底面までが３mと深い上、表土（盛り土）が非常にもろく崩れやすいこと、これに反して調査区の幅が２mと狭いこと、一部に埋設管が残ること、隣地で歩道橋基礎工事が行われていたこと等により、古代官道については調査を断念せざるを得なかった。

調査はまず重機によるⅠ区の表土剝ぎから開始し、人力による掘削と記録の作成を行いながら、順次Ⅱ区へと移行した。遺構実測は、調査区の形状に合わせて任意に設置した基準線をもとに行い、福岡国道工事事務所より提供を受けた座標データを用いて国土座標（第Ⅱ系）上に調査区を位置づけた。標高もこれによる。

２．基本層序　Fig. 6・21

Ⅰ区はFig. 6の土層図に見るように、地表面の標高が12.4m、遺構面の標高が12m前後で、この間は盛り土である。基盤土はいわゆる鳥栖ロームで、削平により平坦にならされ、Ⅰ区西側では下部の八女粘土層が露呈する。遺構は調査区の東側で検出され、西側にはない。丘陵が東に向かって落ちていく変換点にあたっており、第18次調査の所見によると東側では地表下２mまで遺構面が下がり古代官道の路面となる。

Ⅱ区は削平された丘陵部とその西側の谷部とからなる。丘陵部の遺構面の標高は11m強で、削平により東側では八女粘土層が露呈し、これに0.2m弱の造成土が乗っている。谷部は遺構面の標高が10m弱で、Fig.21に示すように最下層に古代の遺物包含層が堆積し、その上を近世以降の水田が覆い、更に近代の客土で厚く埋められている。地表面の標高は11.3mを測る。Ⅱ区の遺構は丘陵が谷部へ落ちる斜面と谷底面に残っていた。

３．発掘調査の概要　Fig. 3

Ⅰ区は、中世の溝と時期不明の小ピットを検出した。しかし、南側第18次調査で確認した古代官道の延長部分は、上記の理由から調査を断念せざるをえなかった。削平により遺構の残りが悪く、軍需工場の建物基礎による破壊が著しい。

Ⅱ区は、丘陵端部で古墳時代の竪穴住居跡・土坑・ピット少数を、谷部で弥生時代後期末の溝、古墳時代の井戸をそれぞれ検出した。Ⅰ区と同様、丘陵部は削平と建物基礎による破壊が著しい。谷部も削平を受けており、下層に古代までの遺物を含む包含層が堆積していたことから、古代ないし中世初め頃までに水田化したようである。

遺物は弥生土器、土師器、初期須恵器、古代瓦の他、滑石製紡錘車などが出土した。量はコンテナ25箱を数えるが、これらは主にⅡ区の溝や井戸、包含層に含まれていた。

概ね南側第18次調査区と同じ内容の遺構・遺物であり、その調査成果を追認したと言えよう。

4．Ⅰ区の検出遺構と出土遺物

(1) 溝

SD－001　Fig. 4、PL. 2

第18次調査Ⅰ区のSD－004に連続する溝で、中世に開削され戦前まで生きていた水路である。第18次では官道切り通しの西側肩に沿って上端幅７～９m、深さ２m強で確認され、古代官道廃絶後の水田化に伴って掘られたと報告されている。今回は一部を調査したのみで、撹乱を受けていた。

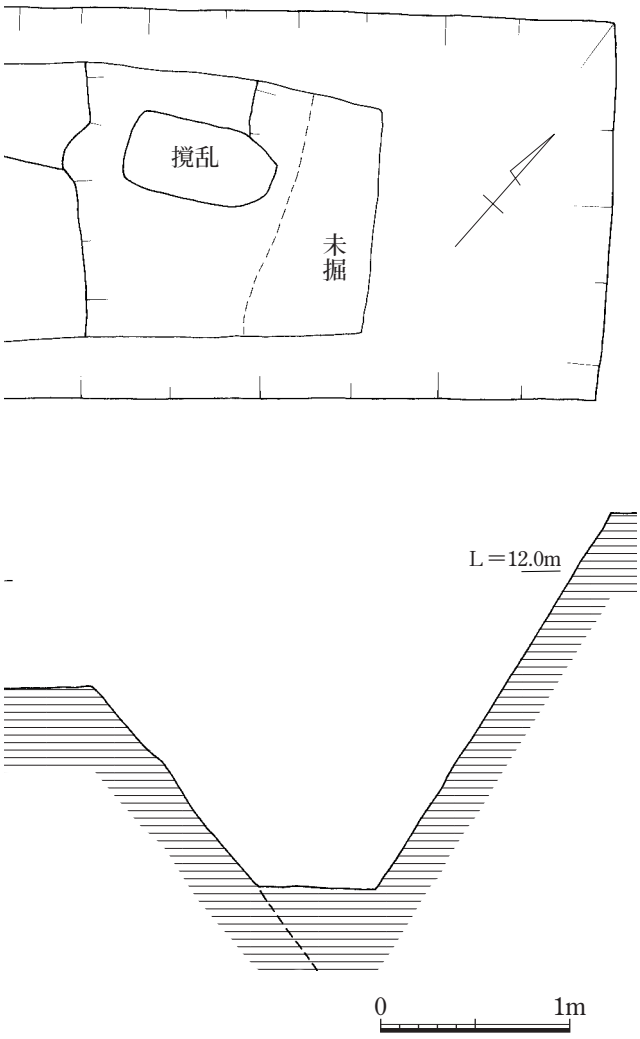


Fig.4　SD－001（1/40）

SD－001 出土遺物　Fig. 5

瓦質火鉢、土師器、瓦等が出土した。１は肥前系染付碗の小片である。２～５は平瓦の小片で、いずれもローリングを受けて磨滅が著しい。胎土に粗砂粒を多量に含む。凸面に縄目叩きを施し、凹面には布目痕が残る。５は模骨の痕跡が僅かに残る。２は炭素が吸着して一部黒褐色を呈するが、他は全て土師質の焼成である。

SD－003・004　Fig. 6、PL. 3

SD－003は第18次調査Ⅰ区検出のSD－005、SD－004は同じくSD－006と同一の遺構である。二つの溝の間には撹乱溝があって切り合いは不明だが、第18次調査の所見ではSD－003→SD－004の順に新しい。両者の覆土は極めて近似する。SD－003は東側の溝で、幅は4.7m以上、極めて浅くかろうじて底面が残っている状態である。SD－004は西側にあって、幅は1.5m以上、深さ0.8mで、溝の形状と土層から最低１回の掘り直しが示唆される。第18次調査では北端でかなり浅くなると報告されたが、その更に北側で再び深くなるものと考えられる。

SD－003 出土遺物　Fig. 7

須恵器、土師器、中国産陶器、瓦がある。６・７は中国産陶器壺である。６は口縁部の小片で、淡灰白色の硬陶質素地に褐釉がかかるが、ほとんど剝落する。７は底部片で、高台は削り出し。淡灰白色の硬陶質素地に淡青灰色不透明釉がかかるが、内外底は露胎。８は平瓦である。胎土に粗砂粒を多量に含む。凸面に縄目叩き、凹面に布目痕が残る。炭素が吸着して一部が黒褐色を呈する。

SD－004 出土遺物　Fig. 7

須恵器、土師器、瓦等が出土した。９は平瓦である。胎土に砂粒を多量に含む。凸面に縄目叩きを施し、凹面には布目痕が残る。10は塼で、胎土に粗砂粒を多量に含む。摩滅のため調整等は明らかではない。

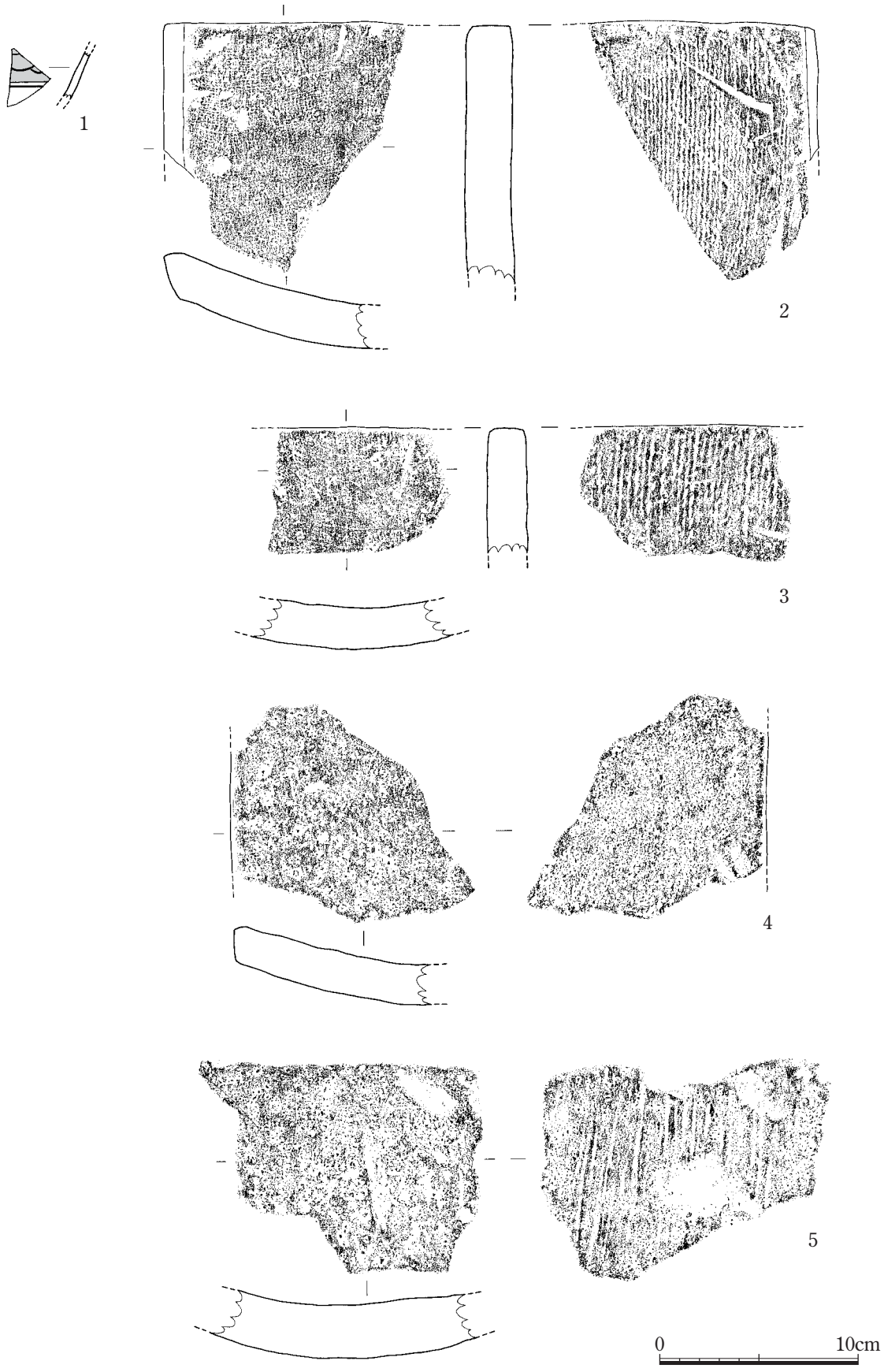


Fig.5　SD－001 出土遺物（1/3）

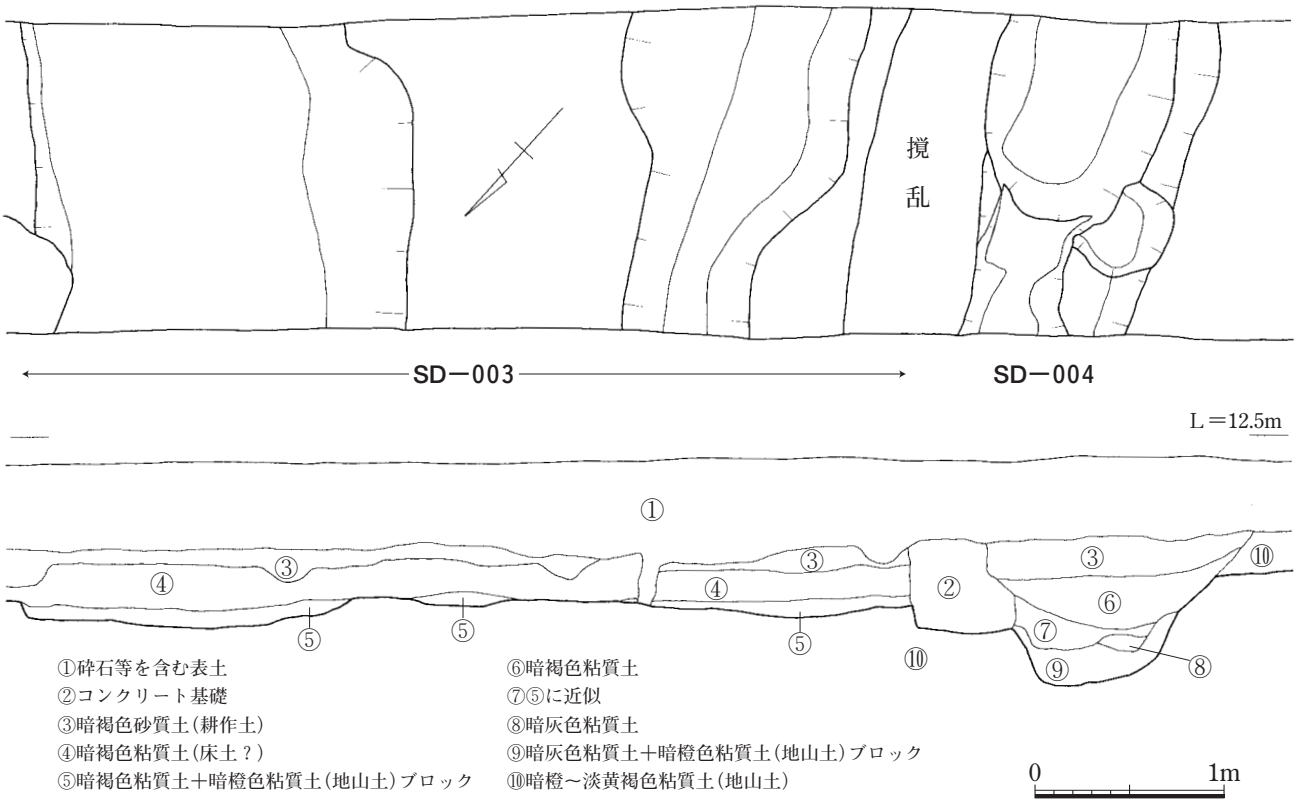


Fig.6　SD－003・004（1/40）

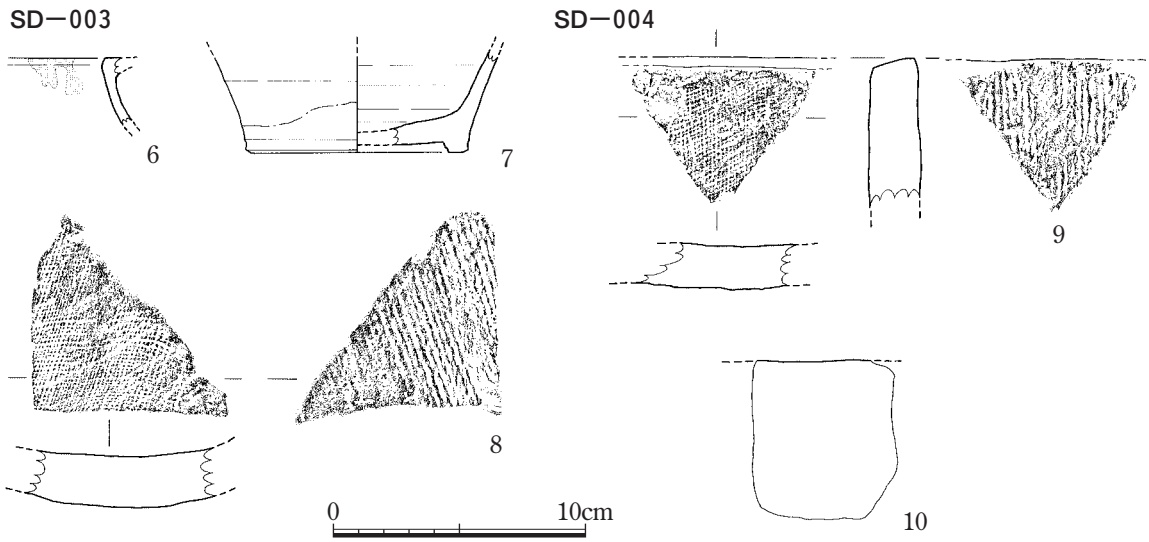


Fig.7　SD－003・004出土遺物（1/3）

(2) その他の遺物　Fig. 8

11は弥生後期の器台形土器と思われる。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好である。磨滅が著しい。ピットSP－005から出土した。

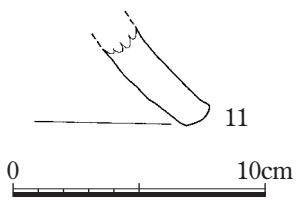


Fig.8　Ⅰ区出土のその他の遺物（1/3）

5．Ⅱ区の検出遺構と出土遺物

(1) 竪穴住居跡

SC－011　Fig. 9、PL. 5・6

丘陵の落ち際にかろうじて残った竪穴住居跡で、削平により住居跡覆土はほとんど消滅し、貼床と壁溝からプランを確認した。調査区が狭く住居の主要部分は区外にある。現状で隅丸方形プランを呈

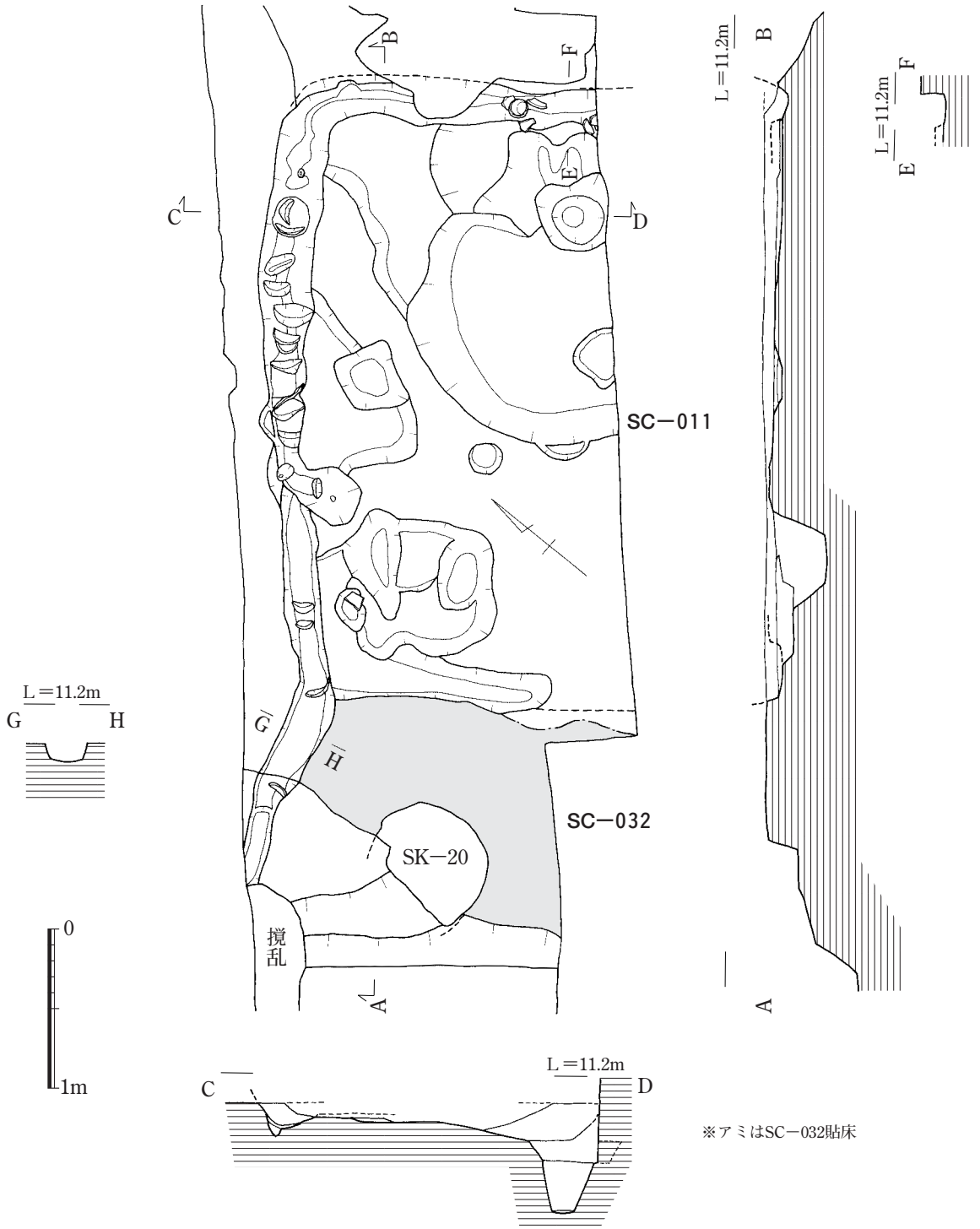


Fig.9　SC－011・032（1/40）

し、4.0m×2.2m以上を測る。壁溝が巡り、住居西隅で壁を突き抜けて屋外へと出、斜面を1.3mほど下った先で攪乱に切られている。壁溝は幅0.2～0.3mで、底面は平坦ではなく多数の凹凸があるが、この窪みは掘削時に生じたものと思われ、刃部幅16cm程度の鋤または鍬の刃先の痕跡をよく留めている。壁溝内に板を立てた痕跡、水の流れた痕跡、焼けた痕跡等は認められない。住居床面には小ピットと不整形の窪みがいくつか見られるが、ひとつを除いて皆浅く、主柱穴は明らかにし難い。これらは全て汚れた地山土（暗黄褐色粘質土）で埋められており、黒色土を覆土とする壁溝とは明らかに異なる。遺物は主に壁溝の覆土より出土した。

SC－011 出土遺物　Fig.10、PL.10

出土遺物は少なく、大半を土師器が占め、須恵器が数点含まれる。

12～17は土師器である。12・13は椀で、口縁は内湾する。摩滅が著しく調整は不明。12は胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好、口径17.0cm。13は胎土が精良で、焼成良好。14は鉢で、上げ底気味の小さな平底で、口縁は内湾する。器面の残りは悪いが、外面には刷毛目が残る。内面は丁寧なナデ、外底は雑なナデを施す。胎土は精良で、焼成は良好。口径11.8cm、器高7.6cm。15は鉢の口縁部片で、屈曲外反して開く。摩滅のため調整不明。胎土は精良、焼成良好、口径12.6cm。16は小壺の肩部片で

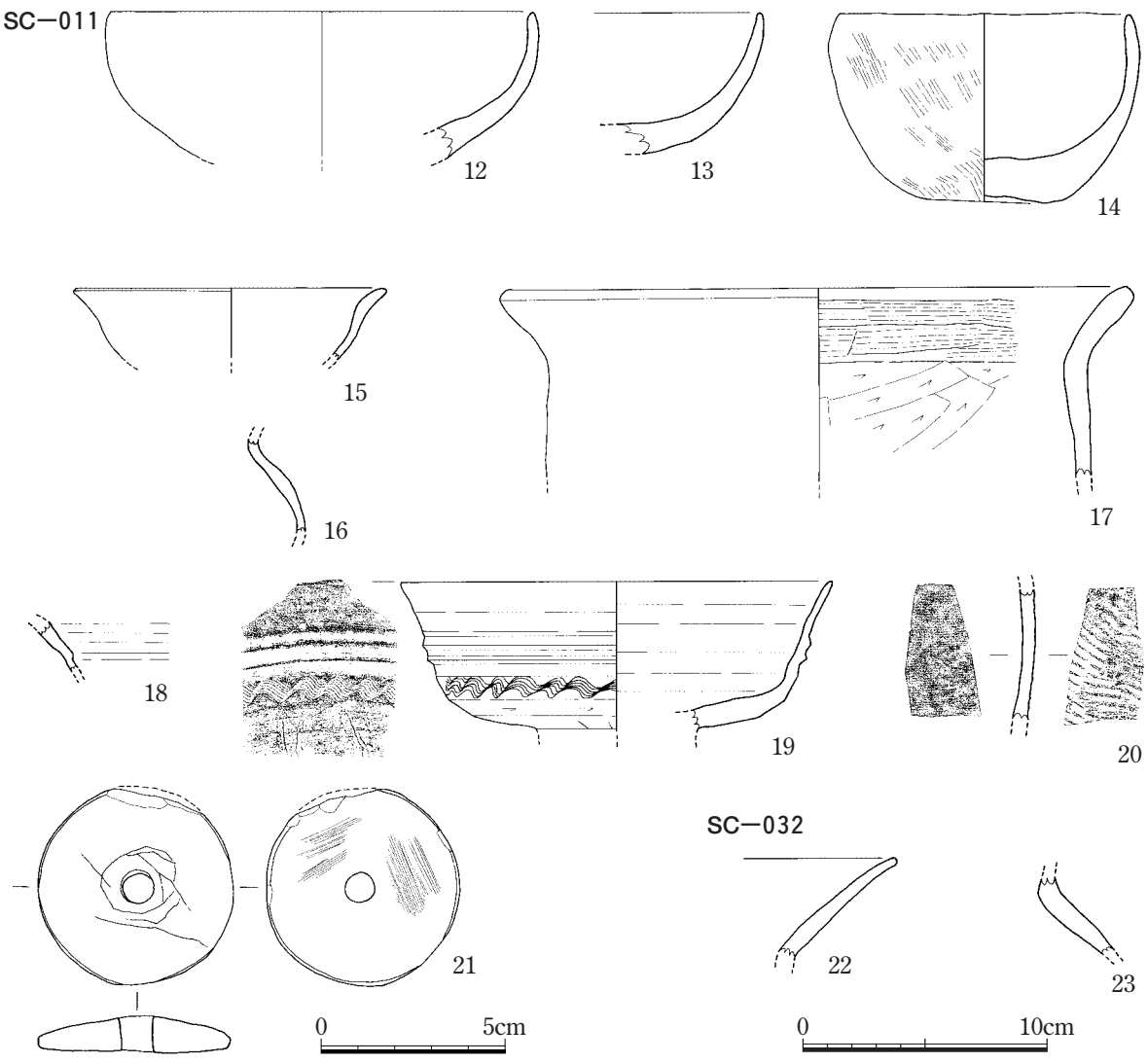


Fig.10　SC－011・032 出土遺物（21は1/2、他は1/3）

ある。器面が摩滅して調整不明。胎土は精良で、焼成良好。17は甕である。内面は口縁部に横方向の刷毛目、胴部にヘラ削りを施す。外面は摩滅しているが、口縁横ナデ、胴部縦の刷毛目。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好。口径25.6cm。

18～20は須恵器である。18は坏蓋の小片である。19は初期須恵器の無蓋高坏である。坏底部は平坦気味で、口縁部は中位で緩く屈曲外反して開き、端部は丸くおさめる。内底の一部にナデを加える。外面中位に二条の突線を巡らせ、直下に９条単位の櫛描波状文を施す。波状文下には回転ヘラ削りが施され、脚部との境には透孔の切り込みが認められる。灰青色を呈し、胎土に砂粒を僅かに含む。焼成は良好で、外面に自然釉が下方からかかることから伏せ焼きであろう。坏部の1/3周ほどの破片で、口径は17.5cmに復原できる。陶邑編年のTK－23段階に位置づけられよう。20は甕の小片で、外面は平行叩き、内面は当て具痕をスリ消す。胎土は精良、焼成は良好で外面にガラス質の自然釉がかかる。

21は滑石製紡錘車である。縁辺の一部を欠く。片面は凸状、他面は平坦になっており、凸面の心孔周辺に浅い線刻で稚拙な装飾を施す。径5.2cm、心孔の径は0.8cm、最も厚い部分で1.0cmを測る。

以上の資料は、16・18が貼床から、他は壁溝から出土した。５世紀後半代の住居であろう。

SC－032　Fig. 9

SC－011の西側に貼床の痕跡のみ確認した。プラン、規模等については一切不明である。

SC－032 出土遺物　Fig.10

貼床を掘削した際に土師器が数片出土した。いずれも摩滅が著しい。22は甕の口縁部片で、僅かに外反して開き、端部は面取する。内面横刷毛目、外面縦刷毛目の痕跡が認められる。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良。23は甕の肩部片である。内面にヘラ削りの痕跡を留める。胎土に粗砂粒を多量に含み、焼成は良好。

(2) 溝

SD－030　Fig.11、PL. 7

谷部底面で検出した。SE－029に切られる。第18次調査Ⅱ・Ⅲ区検出のSD－031に連続する溝である。上端幅2.5m、深さ0.5mで、横断面形は緩やかな「U」字形をなす。覆土は黒色粘質土で、最下層に薄く粗砂が堆積する。上面は古代の遺物包含層SX－012に覆われる。

SD－030 出土遺物　Fig.12～16、PL.10

出土遺物は弥生時代終末までの土器が主体を占め、古墳時代の土師器や須恵器甕片が少量混入する。

24は弥生時代中期の丹塗り壺の胴部片で、摩滅が著しい。断面M字形の突帯を貼り付け、横ナデするが、器面が剝げ落ちて他の調整は不明である。胎土に砂粒を少量含み、焼成はやや不良。

25～31は鉢類である。25は深い鉢形で、平底から丸みを持って胴部が立ち上がり、口縁が少し開く。内外面に雑な刷毛目を施し、外面はナデを加える。内底は幅の狭い板状工具でナデ調整を施す。外底は無調整で、全体に粗雑なつくりである。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で胴部外面の相対する２ヶ所に黒斑がある。口径11.9cm、器高11.9cm。26は鉢もしくは小甕で、丸みを持った不安定な平底である。外面にナデ、内面に板状工具によるナデ調整を施し、内底には指押さえの痕が残る。底径6.4cm。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。27は突出したいびつな底部を持つ畿内系の鉢である。内外面とも雑な刷毛目を施す。胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。口径10.6cm、器高7.6cm。28は薄い平底から円筒形の胴部が立ち上がる特異な器形で、いわゆるジョッキ形土器の類か。外面は刷毛目、内面はナデを施す。胎土に砂粒を少量含み、焼成はやや不良。底径は9.2cm。29は口縁端部

が外反する鉢である。胴部内面は刷毛目、口縁部は横ナデで、胴部外面は調整不明。胎土に砂粒を少量含み、焼成はやや不良。30・31は鉢の脚で、接合部からラッパ状に開く。ともに刷毛目調整で、30は外面に幅広のヘラ研磨を加える。30は焼成不良で、底径11.6cm。31は焼成良好で、底径10.8cm。32は手捏ねのミニチュア土器である。胎土は精良で、焼成は不良である。

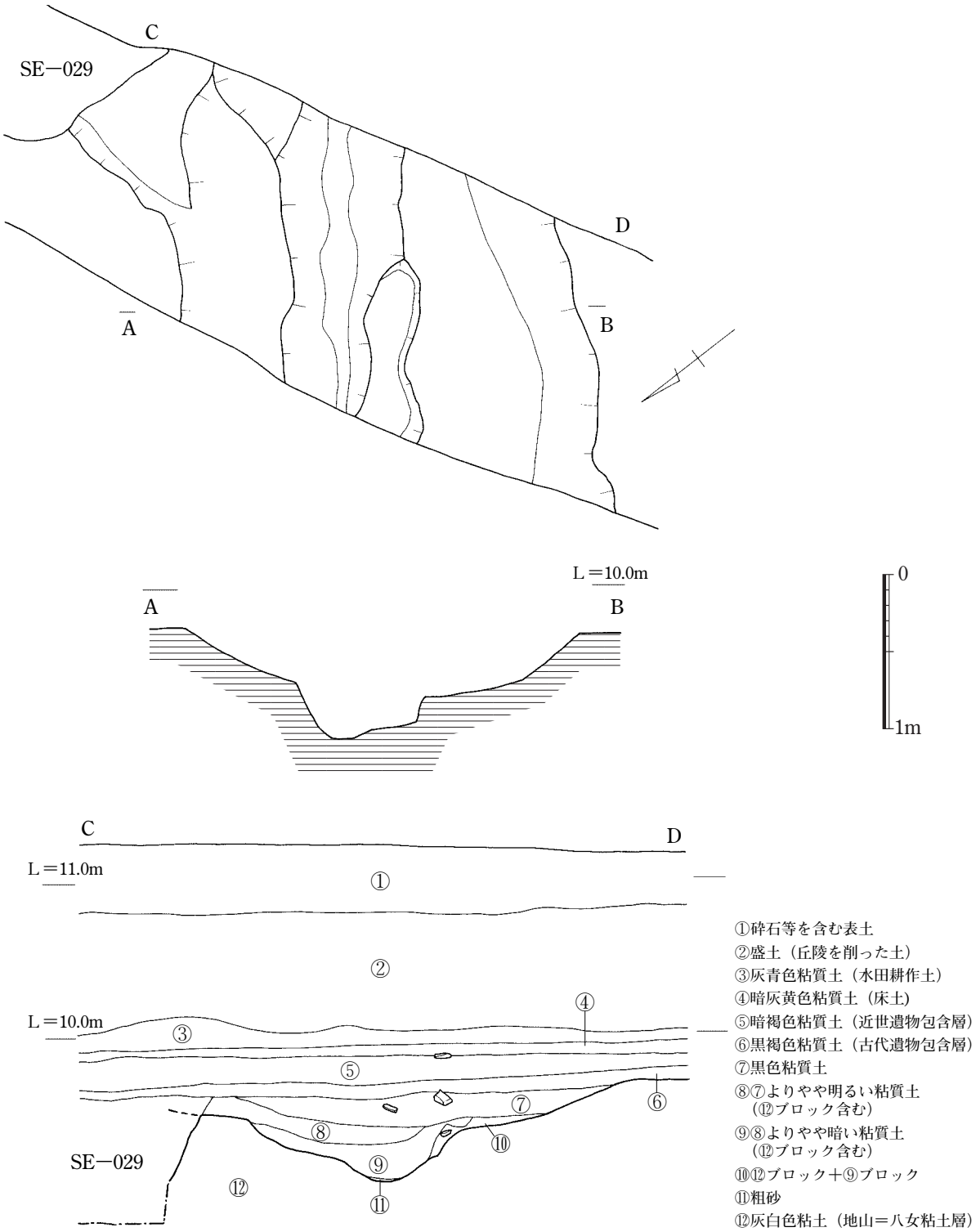


Fig.11　SD−030（1/40）

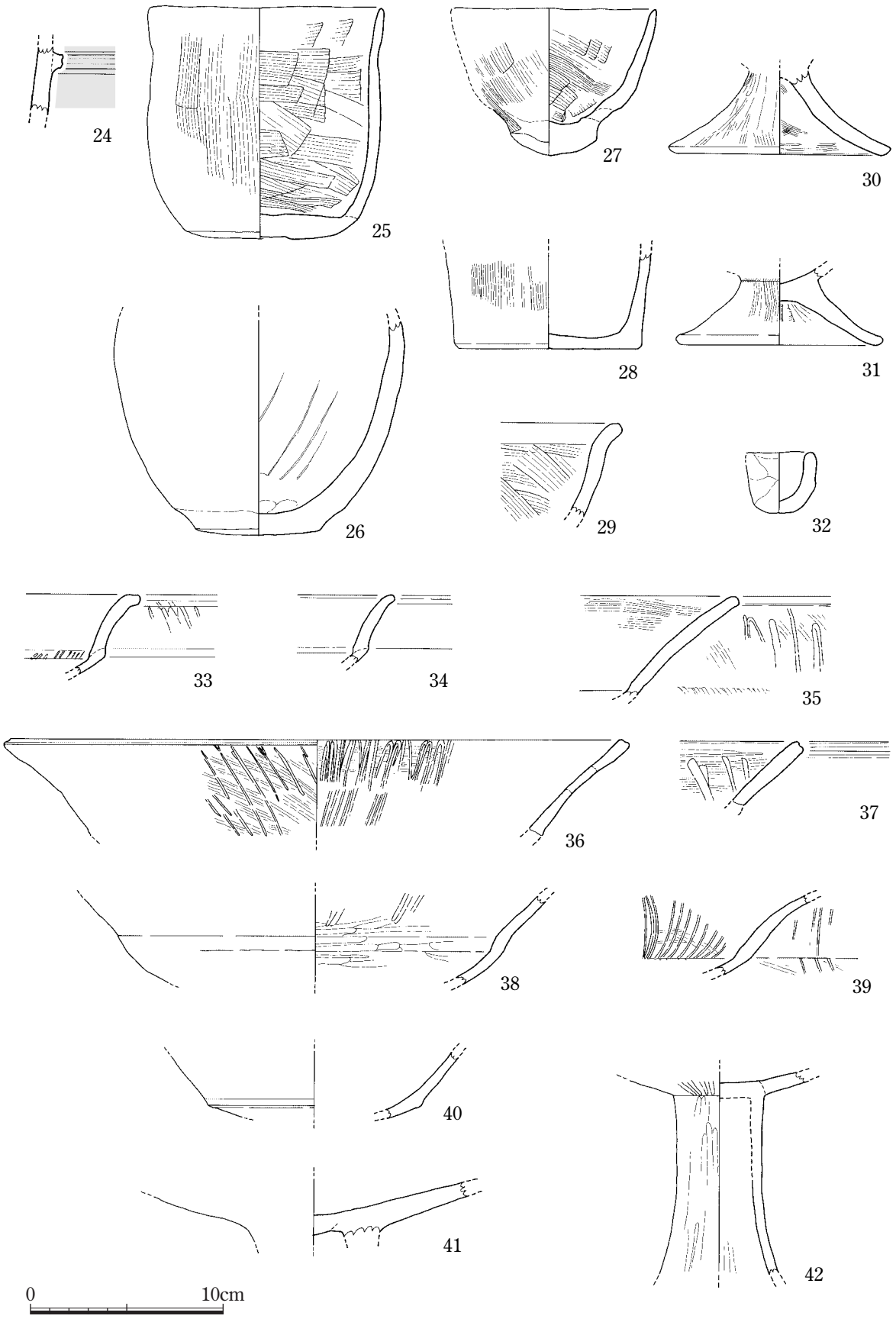


Fig.12　SD－030 出土遺物Ⅰ（1/3）

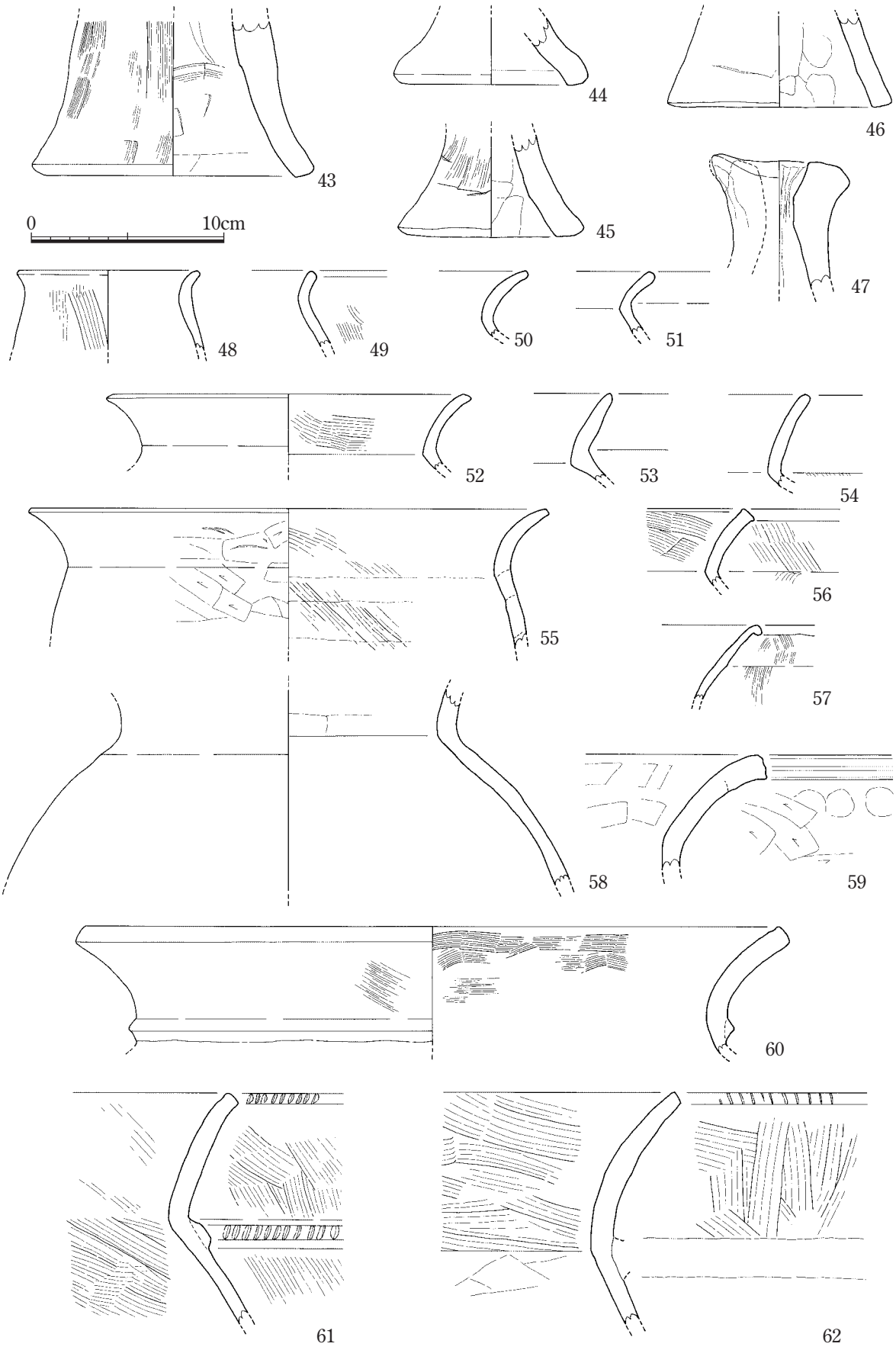


Fig.13　SD－030 出土遺物Ⅱ（1/3）

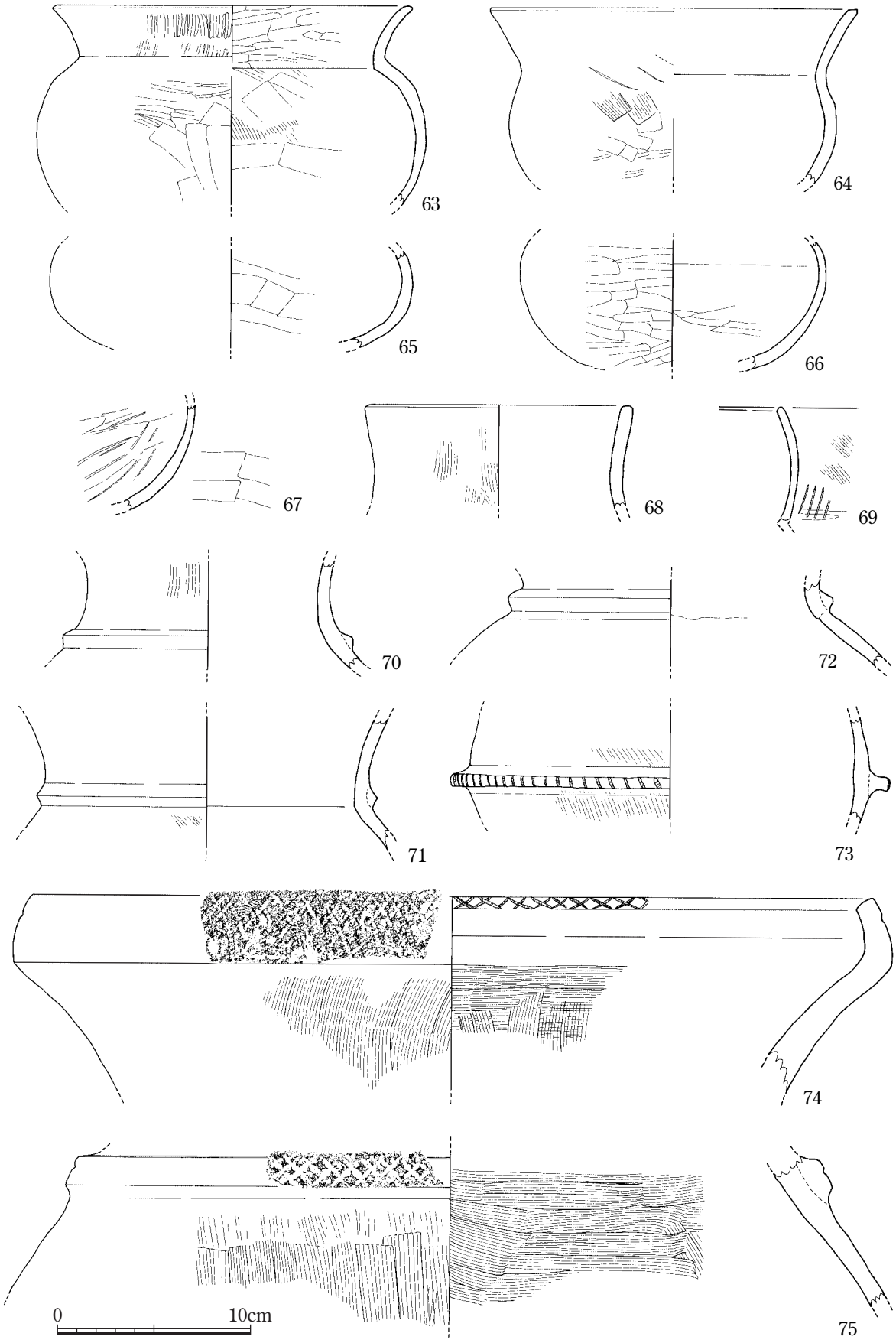


Fig.14　SD－030 出土遺物Ⅲ（1/3）

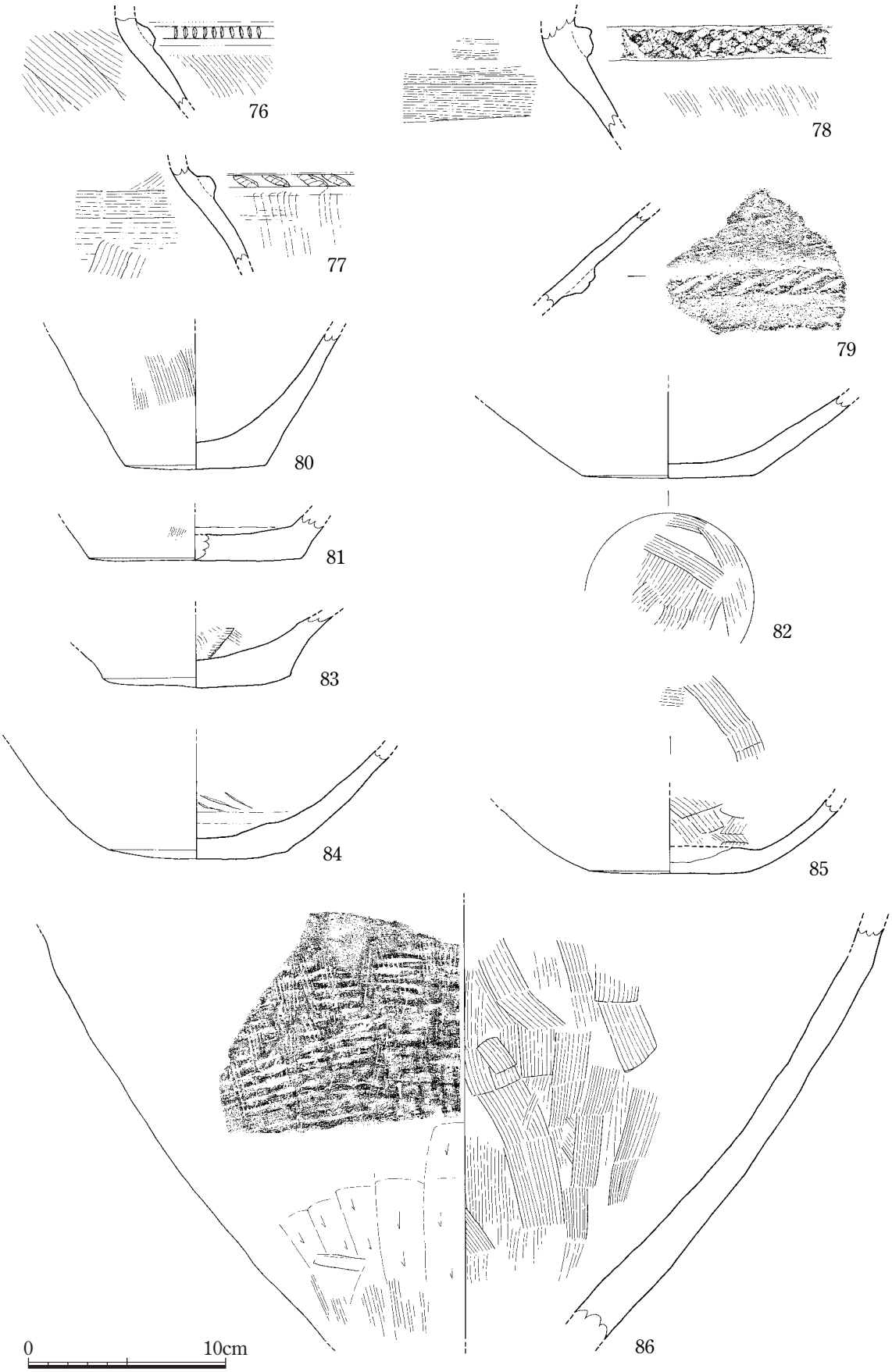


Fig.15　SD－030 出土遺物Ⅳ（1/3）

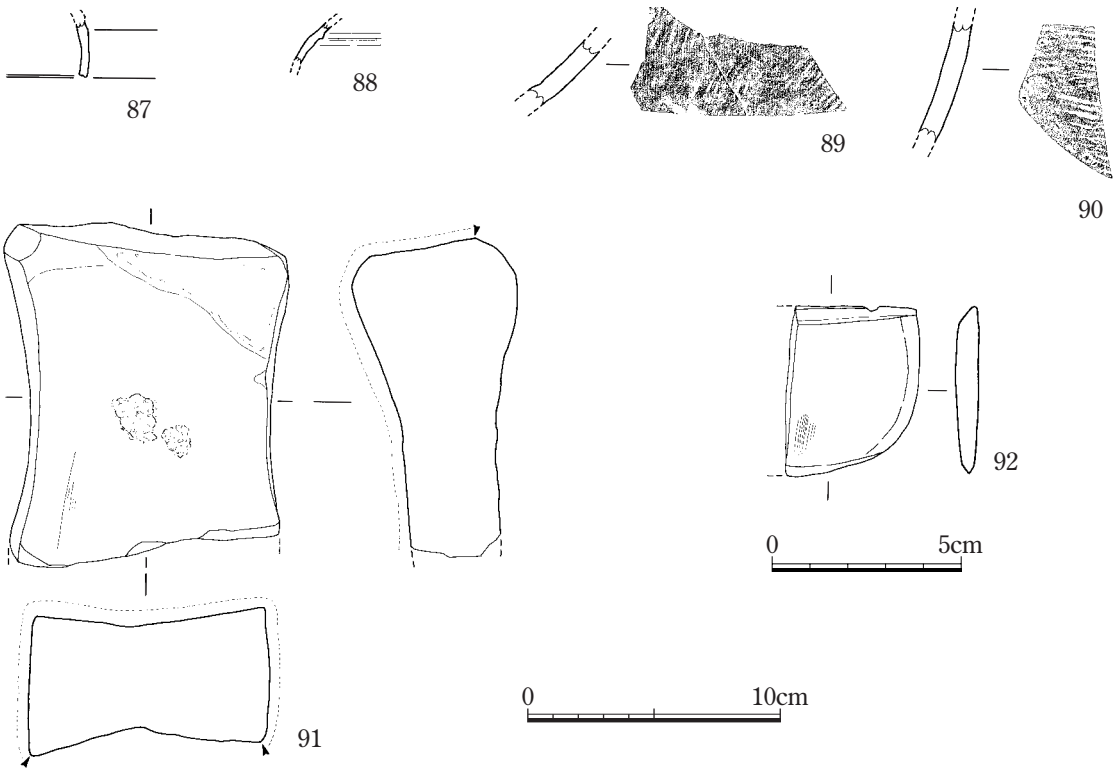


Fig.16　SD－030 出土遺物Ⅴ（92は1/2、他は1/3）

33～42は高坏である。33・34は口縁が短く外反して開き、端部を外方へつまみ出す。ともに、内外面横ナデの後、縦位の暗文を施し、胎土は精良、焼成不良。35～37は口縁が長く伸び、端部は面取りし、沈線を巡らすものもある。いずれも調整は縦刷毛目、端部横ナデ、暗文の順である。35は胎土に大粒の砂粒と雲母微粒を含むが精良で、焼成良好。36は胎土に雲母粒を含み精良、焼成不良、口径32.2cm。37は胎土に少量の砂粒と雲母粒を含み、焼成良好。38～40は坏屈曲部の破片で、40のみ屈曲部外面に小さな段を持つ。38は内面が横位の丁寧なヘラナデ後暗文で外面調整不明、胎土に少量の砂粒と雲母粒を含み、焼成良好。39は内面が横刷毛目後暗文、外面が削り気味のヘラナデ後暗文を施し、胎土に雲母粒を含み精良、焼成やや不良。40は摩滅のため調整不明、胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。41は坏底部で、脚を坏底に差し込んで接合する。器面が荒れて調整は定かでない。砂粒を多量に含み、焼成は不良。42は坏底から脚上部の破片で、接合方法は41と同じ。ナデ調整で、坏内底と外面に雑な暗文を施す。胎土に雲母粒を含むが精良で、焼成不良。

43～46は器台の底部片である。43は外面が細い縦刷毛目で、内面が雑なナデと横刷毛目、底径14.5cm。44は調整不明、底径10.0cm。45は外面ナデと縦刷毛目、内面指ナデ、底径9.6cm。46は内面指ナデ。いずれも胎土に粗砂粒を多量に含み、43・44は二次加熱を受ける。47は沓形器台（支脚）で、頂部に円孔を穿つ。内面にシボリ痕があり、ナデ調整。砂粒を多量に含み、二次加熱を受ける。

48～58は小・中型の甕である。48・49は口縁部が短く外反し、外面縦刷毛目、内面ナデの後、口縁横ナデを施す。胎土に砂粒が多く、焼成不良。48は口径9.4cm。50～58は「く」字形に屈曲外反する口縁部だが、50・55・58は屈曲部の稜が不明瞭である。調整は概ね刷毛目を基調として口縁を横ナデ、胴内面をナデ調整するが、52・53の胴部内面、58の頸部内面はヘラ削りであろう。55は外面をヘラ状工具で研磨気味にナデる。また、胎土も55のみ砂粒が少ない。口径は52が18.8cm、55が26.9cm。

59～62は大型の甕である。59は口縁が大きく外反し、端部に浅い沈線２条が巡る。内外面とも板状工具によるナデ調整。60～62は頸部に突帯を貼り付け、60は断面三角形、61は断面台形をなす。いず

れも刷毛目ないしは板状工具によるナデを施す。61は口唇と突帯上に、62は口唇に刻目を入れる。

63～73は小・中型の壺である。63・64は扁平な球形胴部を持つ広口壺で、63は外反して、64は直に開く口縁部が付く。63は胴部に最大径があり、外面下半は板状工具によるナデ、上半～口縁部はヘラ磨きを施す。内面は口縁部が粗い磨き、胴部は刷毛目の上からヘラナデを施す。胎土は精良。64は口縁に最大径があり、胴部外面は刷毛目の後、板状工具によるナデ、内面はヘラ削りの後ナデとみられるが判然としない。65～66は胴部片である。65は外面に研磨状のヘラナデ、内面に丁寧なナデが施される。66は外面をヘラ研磨、内面を丁寧なヘラナデし上端に横方向のナデがある。胎土は精良で、焼成はやや不良。67は器面が荒れて調整不明瞭だが、外面下半は面取り状にヘラナデ、内面は雑なヘラナデが認められる。68は直口壺か。外面に刷毛目調整を施す。69は内傾内湾する口縁で、下端で屈曲する。瓢形のような器形をなすものか。外面には刷毛目の後縦に暗文を施す。胎土は雲母を含むが精良で、焼成は不良。70～73は二重口縁壺である。70～72は頸部片で、断面三角形突帯を貼付する。器面の残りが悪いが、71のみ胴部内面ヘラ削りか。73は胴部片で、高い台形突帯を貼り付け、刷毛目原体で刻み目を入れる。外面刷毛目、内面ナデ調整。

74～79は大型の二重口縁壺である。74・75は同一個体で、肩部に断面台形の突帯を貼付する。内外面に刷毛目を施した後、口唇と口縁外面、突帯上に刷毛目原体を押し当てて格子状の刻目を加える。口径43.2cm。76～78は頸部片、79は底部付近の破片で、断面台形の突帯を貼付し、刷毛目原体で刻目を押圧する。内外面とも刷毛目調整だが、79は外面に叩き痕が認められる。

80～85は底部片である。82・85は壺、他は甕であろう。80～82は安定の悪い平底、83・84は凸レンズ状の底部で、85は底部が痕跡的で丸底に近い。いずれも外面刷毛目、内面ナデを基調とする調整である。86は底部付近の破片で、傾きや法量は不正確である。外面は叩きの後、縦刷毛目を施し、下部のみ雑なヘラ削りを加える。内面は縦刷毛目調整。

87～90は須恵器の小片で、溝上面の古代遺物包含層から混入したものであろう。87は坏蓋、88は甕か。89・90は甕の胴部片で、外面は平行叩きを半スリ消し、内面は当て具痕を完全にスリ消している。

91は砥石で、割れた下面以外は全て使用痕がある。正面の中央部には敲打痕があり、裏面も敲打により表面が剝がれ落ちている。硬質砂岩製。92は石庖丁である。研磨により光沢がある。玄武岩製か。

以上の遺物より、溝の時期は弥生時代終末であろう。

(3) 井戸

SE－029　Fig.17、PL. 7・8

谷部底面で検出した素掘りの井戸である。SD－030を切っている。調査時に底面を掘り過ぎている。調査区壁にかかり遺構の約半分を調査したに過ぎないが、現況で径1.6mの円形プランを呈し、横断面形は逆台形状で、深さ0.9mを測る。遺構の上面はSD－030同様、古代遺物包含層に覆われていた。

SE－029 出土遺物　Fig.18、PL.10

出土遺物の大半は土師器で、弥生土器と数片の須恵器甕片等を含む。

93は弥生土器の高坏脚部で3方に透孔がある。内面にシボリ痕が残り、外面はヘラ研磨か。94は土師器高坏で、口縁は外反して開き、坏底は平坦である。脚はラッパ状に開く。脚を坏底に貼り付けて粘土を充填し、坏底と口縁の接合部には刻み目を入れる。全体に刷毛目を施すが、脚外面にはタタキ痕が残る。脚内面はヘラ削りである。胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良。口径18.5cm、器高12.0cm。95は土師器椀である。外面は板状工具によりナデ調整される。胎土に雲母粒を含み精良、焼成はやや不良で底部に黒斑がある。96・97は土師器丸底壺である。96は小形で、内面ナデ、外面は刷

毛目調整か。胎土に雲母粒を含み精良、焼成はやや不良。97は土層図に示した位置から出土した。口縁部を一部欠くがほぼ完品で、少し扁平な球形胴部で、口縁は短く外反する。肩部内面に粘土積み上げの痕をよく残す。内面に指頭痕があるが、全体に板状工具により粗くナデ調整する。胎土に粗砂粒と雲母粒を多く含み、焼成良好で外底部に黒斑がある。口径8.6cm、器高10.8cm。98・99は小型の甕である。98は胴部内面にヘラ削りを施す。口径15.8cm。99は内湾気味に口縁が開く。外面から口縁内面にかけて刷毛目、胴内面にヘラ削りを施す。口径19.0cm。ともに胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。100は甑である。牛角状の把手を胴部に差し込んで周囲に粘土を充填している。外面刷毛目、内面は上部に刷毛目後、下半にヘラ削りを施す。内外上端に横ナデが認められ、口縁に近い部位の破片であろう。胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良で内面が黒色を呈する。

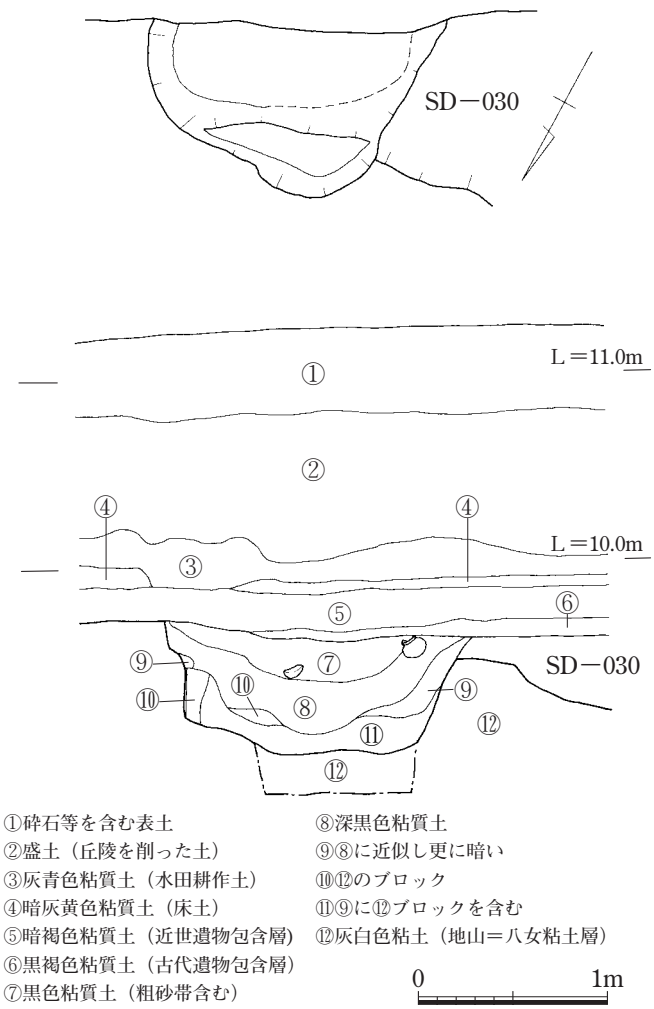


Fig.17　SE－029（1/40）

101・102は須恵器甕の破片で、101は外面平行叩きを半スリ消し、内面当て具痕をほぼスリ消し、102は外面平行叩きをほぼスリ消し、内面当て具痕を完全にスリ消している。103は朝鮮半島系土器の外耳と思われる。方柱状を呈し、1ヶ所に穿孔がある。白味の強い淡褐色を呈し、胎土には粗大な石英粒を多く含むが精良で、焼成は良好。104は土製の玉である。径2.5cmで、径0.4cmの孔が通る。105は有溝石錘か。長軸に沿って溝が一周する。石材は花崗岩で、被熱している。重さ400g。

5世紀後半頃の井戸であろう。

(4) 土坑

SK－013　Fig.19、PL. 9

Ⅱ区の最も東側で検出した。削平をかろうじて免れており、柱穴等の深い遺構の一部と思われる。円形プランを呈し、径0.7m、深さ0.25mを測る。

SK－013 出土遺物　Fig.20

土師器が少量出土した。106は高坏片である。脚を坏底に差し込んで粘土を充填する。摩滅しているが、坏部内底面に板状工具によるナデが認められる。胎土は精良で、焼成良好。107は甕の口縁部片である。摩滅が著しいが、内外面ともナデ調整であろう。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成は良好。

古墳時代の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

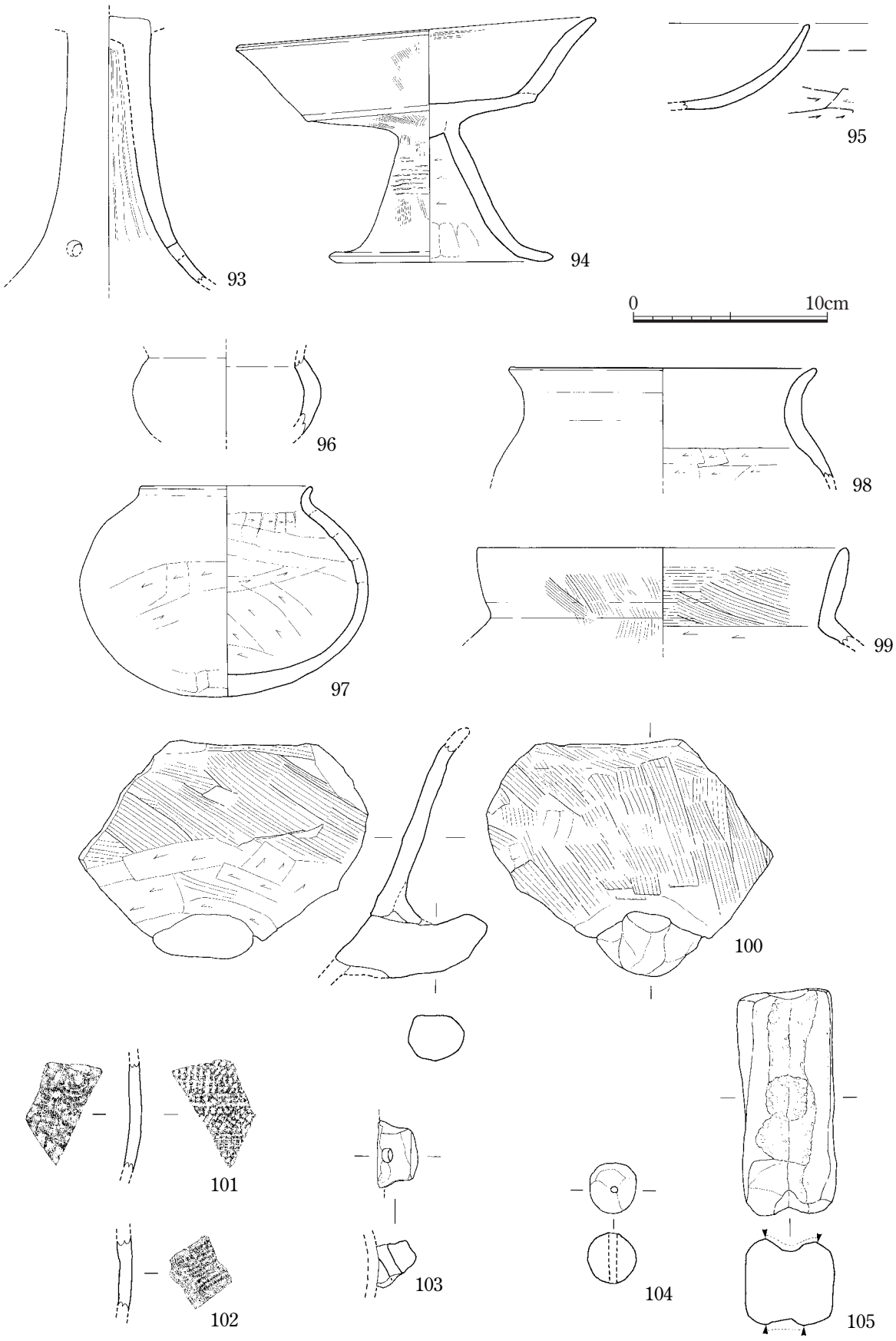


Fig.18　SE－029出土遺物（1/3）

SK－020　Fig.19、PL. 8

竪穴住居跡SC－011の西側に検出した。谷部の落ち際に位置し、削平により遺構の約1/2を失う。円形プランで径0.76m、深さ0.24mを測る。底面に貼り付いた状態で土師器甕片がまとまって出土した。

SK－020 出土遺物　Fig.20、PL.10

少量の土師器が出土した。108は高坏片で、摩滅が著しく調整は不明。胎土は精良で、焼成良好。109は甕の口縁から頸部にかけての破片で、口縁が外反して開き、端部は丸い。外面と口縁内面を刷毛目、胴部内面をヘラ削りし、最後に口縁内外を横ナデする。胎土に砂粒を少量含み、焼成良好。口径は14.6cmに復元できる。110は甕の胴部片で、長胴気味である。外面刷毛目、内面ヘラ削りを施す。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成はやや不良で外面に黒斑がある。

古墳時代中期の土坑であろう。

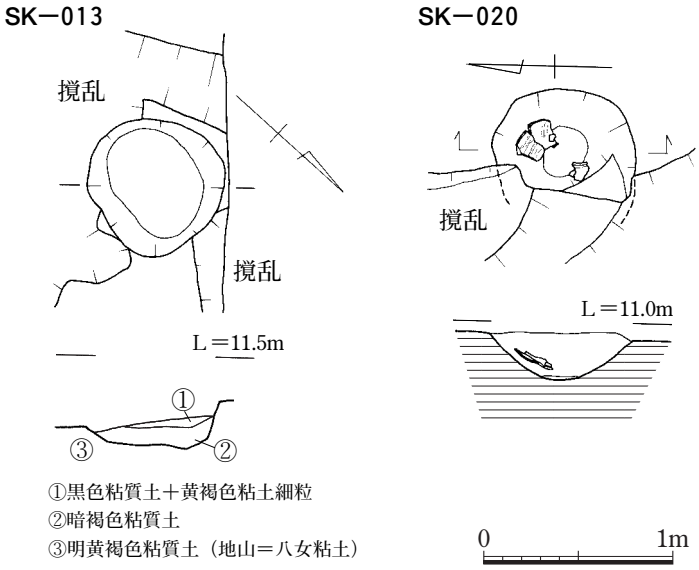


Fig.19　SK－013・020（1/40）

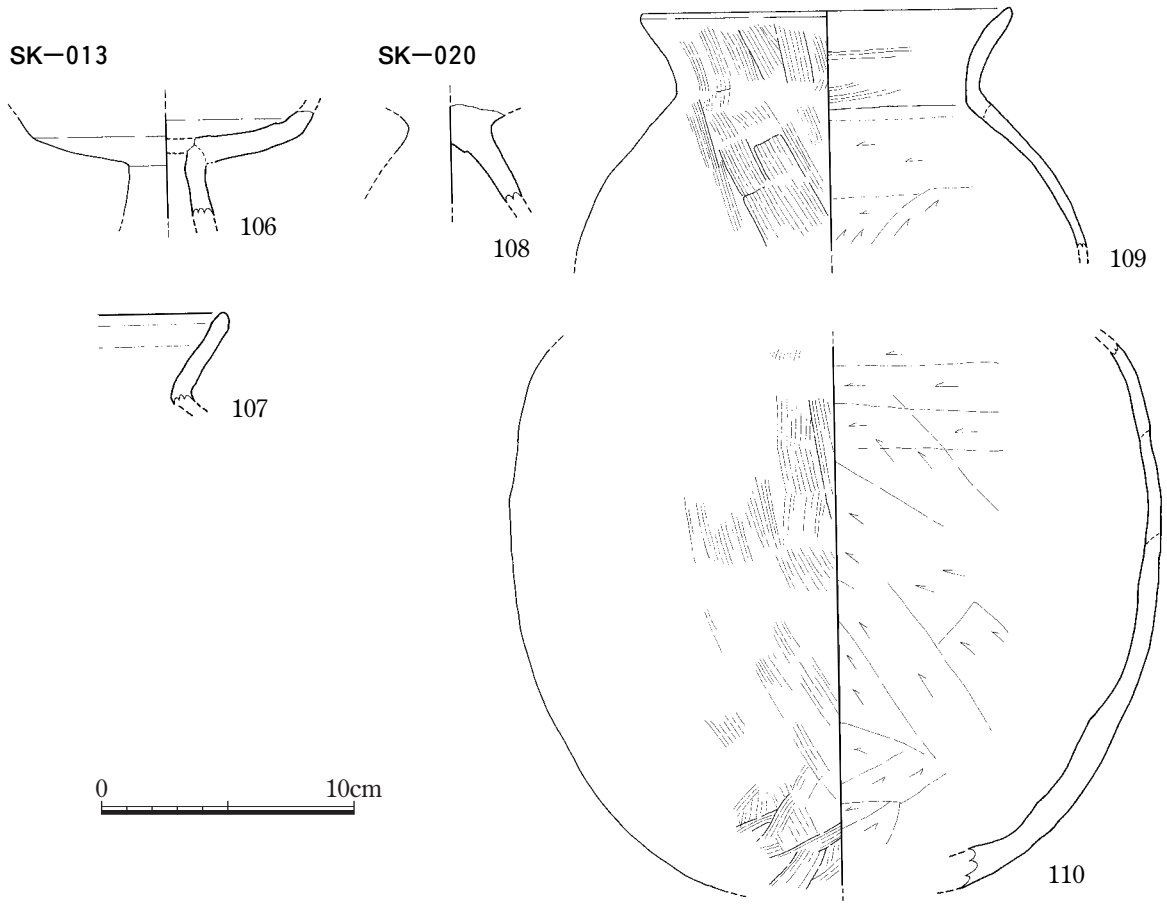


Fig.20　SK－013・020出土遺物（1/3）

(5) 包含層

SX－012　Fig.21、PL. 7

谷部の包含層SX－012から出土した遺物は上、中、下の３層に区分して取り上げた。下層は⑪層の黒褐色粘質土で、古代以前の土器を含む。中層は⑥～⑨層で、近世水田の床土を主体とする層である。上層はその上位層で、現代までの造成土を含む。古代末から中世初頭頃に一帯が水田化された際に⑪層が形成され、その後も水田が拡張造成されたことが土層と出土遺物から窺える。

SX－012 出土遺物　Fig.22～26、PL.10

111～127は弥生時代後期～終末の土器で、いずれもローリングが著しい。111～113は高坏の脚部である。111・112は筒部の破片で、内面にシボリ痕がある。胎土は精良。113は裾部の破片で、内外面刷毛目調整を施す。胎土は精良。114は器台の脚部で、接地部分を厚く作る。胎土に砂粒を多量に含む。復元底径は14.4cm。115～121は二重口縁壺である。115・116は口縁部片で、115は口縁が内傾内湾し、116は折り返し部分から剝げ落ちている。胎土に砂粒を多量に含み、115は口径17.6cm。117は

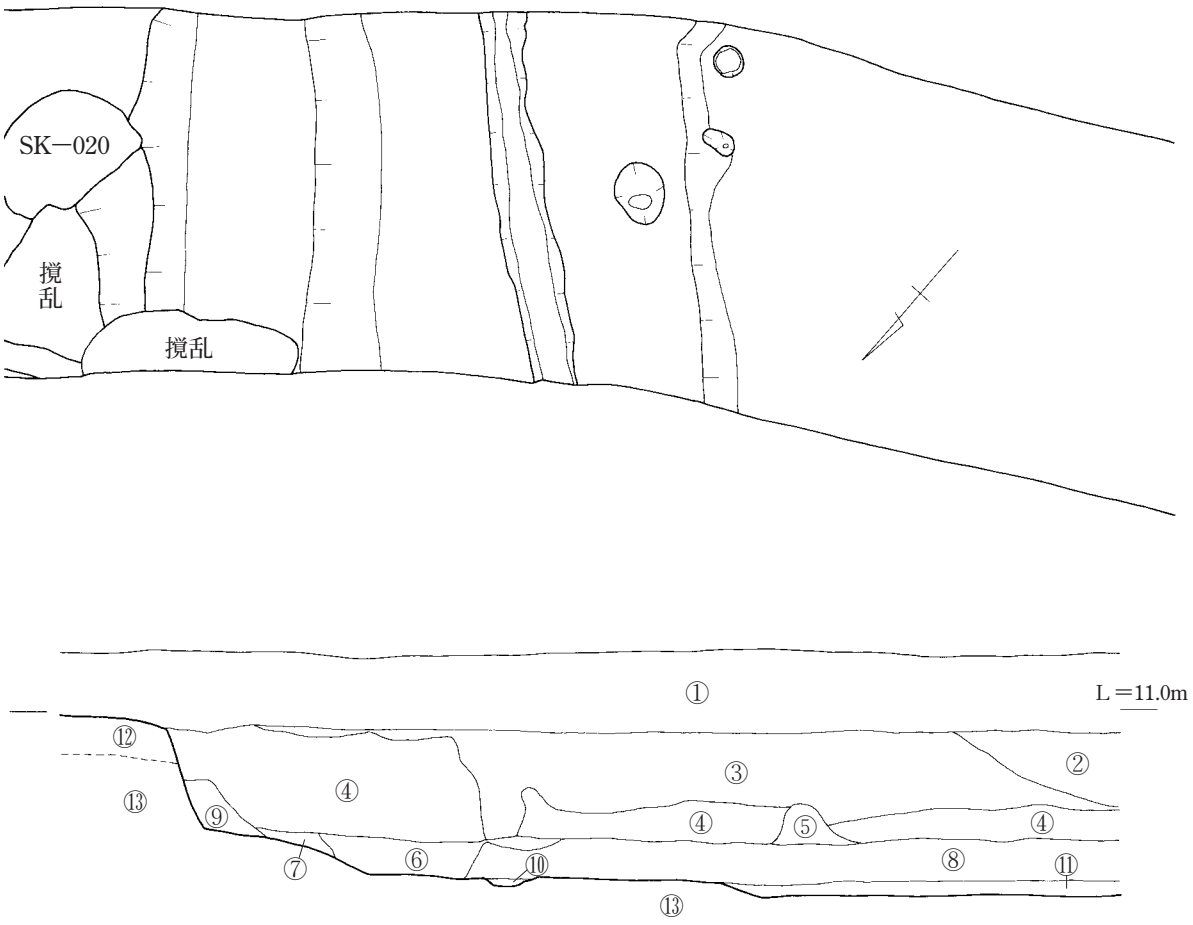


Fig.21　SX－012（1/40）

二重口縁壺で、口縁が剝げ落ちている。胎土に粗砂粒を多量に含む。118 ～121は頸部から肩部の破片で、いずれも屈曲部に突帯を貼り付ける。118は突帯が剝落する。胎土に細砂粒を多量に含む。119は断面三角形突帯で刻目が入る。胎土に砂粒を多量に含む。120は低い断面台形突帯で、刻目が密に入る。胎土に砂粒を多量に含む。内外面に刷毛目を留める。121は突帯がやや下がった位置に付き、刷毛目原体で格子状に刻目を押圧する。胎土に粗砂粒を多量に含む。122は胴部下位の破片で、高めの断面台形突帯を貼付する。外面刷毛目、内面ナデ調整で、胎土に細砂粒を多量に含む。123～125は甕である。123・124は口縁端部片で、口唇面に刷毛目原体による斜格子状の刻目を押圧する。123は外面は刷毛目調整で、胎土に粗砂粒を多量に含む。124は胎土に砂粒を多量に含む。125は口縁部片で、胴部内面をヘラ削りする。胎土に細砂粒を多量に含む。126・127は底部片である。126は凸レンズ状の平底で、胎土に細砂粒を多量に含む。復元底径は5.6cm。127はほとんど丸底に近い。粗砂粒を多量に含む。

128～133は古墳時代の土師器である。ローリングが著しい。128は椀で、口縁が内湾する。外面ヘラ削り、内面ナデ調整。胎土に細砂粒を多量に含む。129～132は高坏である。129～131は坏底から脚上端の破片で、脚を貼り付けて接合し、粘土を充填する。129は胎土が精良で、130は粗砂粒を多量、131は細砂粒を少量含む。132は脚底部片で、胎土は精良。復元底径は10.4cm。133は甑の把手である。胎土に砂粒を少量含む。

134～159は須恵器で、古代までのものを含む。134～138は坏蓋である。134は口縁端部が内傾し凹面をなす。135は口縁端部が内傾し段をなす。いずれも外面天井部との境には凹線を巡らす。136は天井部との境に沈線により稜をつくる。137・138は口縁端部が丸い。139～144は坏身である。蓋受けの立ち上がりは短く内傾し、端部は丸い。受け部は短く水平にのびる。141・143は外面下半に回転ヘラ削りを施す。139の復元口径は11.0cm。145は無蓋高坏の口縁部で、外反して開く。低くシャープな断面三角形の突帯が 2 条巡るようだ。146は𤭯の口縁部か。内湾気味に開き、端部は丸い。外面には断面三角形の小さく鈍い突帯を巡らし、その下に 9 条の櫛描波状文を施す。濃灰青色を呈すが、焼成が悪く、破面は暗赤褐色を呈する。復元口径は9.4cm。初期須恵器と思われる。147～157は甕類の口縁部片である。147～150は頸部に櫛描波状文を施す一群、151・152は口縁下に断面三角形突帯を巡らす一群、153・154は端部を上に引き上げる一群、155・156は端部を面取りし、157は外反するものである。155は復元口径13.6cm。158は器台等の大型器種の底部から脚上端の破片であろう。外底は平行叩きを半スリ消し、内底は当て具痕を完全にスリ消す。脚は斜めに透孔を切り込む。159は底部片で、外面は回転ヘラ削りする。復元底径11.0cmで、古代の鉢類であろう。

160～163は古代の土師器である。160は小皿で、外底はヘラ切り。底径6.2cm。161は坏で、外底はヘラ切り。復元底径8.0cm。162・163は椀である。162は高台がやや高く、復元高台径7.8cm。163は高台が小さく断面三角形で、復元高台径7.2cm。164～168は黒色土器Ａ類椀である。164は高台が細くやや高く、復元径7.0cm。165～168は高台が低く断面三角形で、復元高台径は順に7.2cm、7.6cm、8.0cm、7.6cm。169は黒色土器Ｂ類椀で、内外面に磨き痕は認められない。復元口径は16.0cm。以上のうち、162、164、166、169が下層から出土した。

170は越州窯系青磁碗である。淡灰褐色の硬陶質素地に黄味の強い淡オリーブ色不透明釉がかかる。全釉で外底に目痕が残る。恐らく蛇の目高台になると思われ、復元底径は4.8cm。下層から出土した。171は肥前系染付碗である。復元口径は9.2cm。上層出土である。

172は取瓶と思われる。胎土はかなり粗く二次焼成を受ける。

173～188は瓦である。173・174は軒平瓦である。173は内区が幅狭で、外区上縁に珠文、下縁に鋸

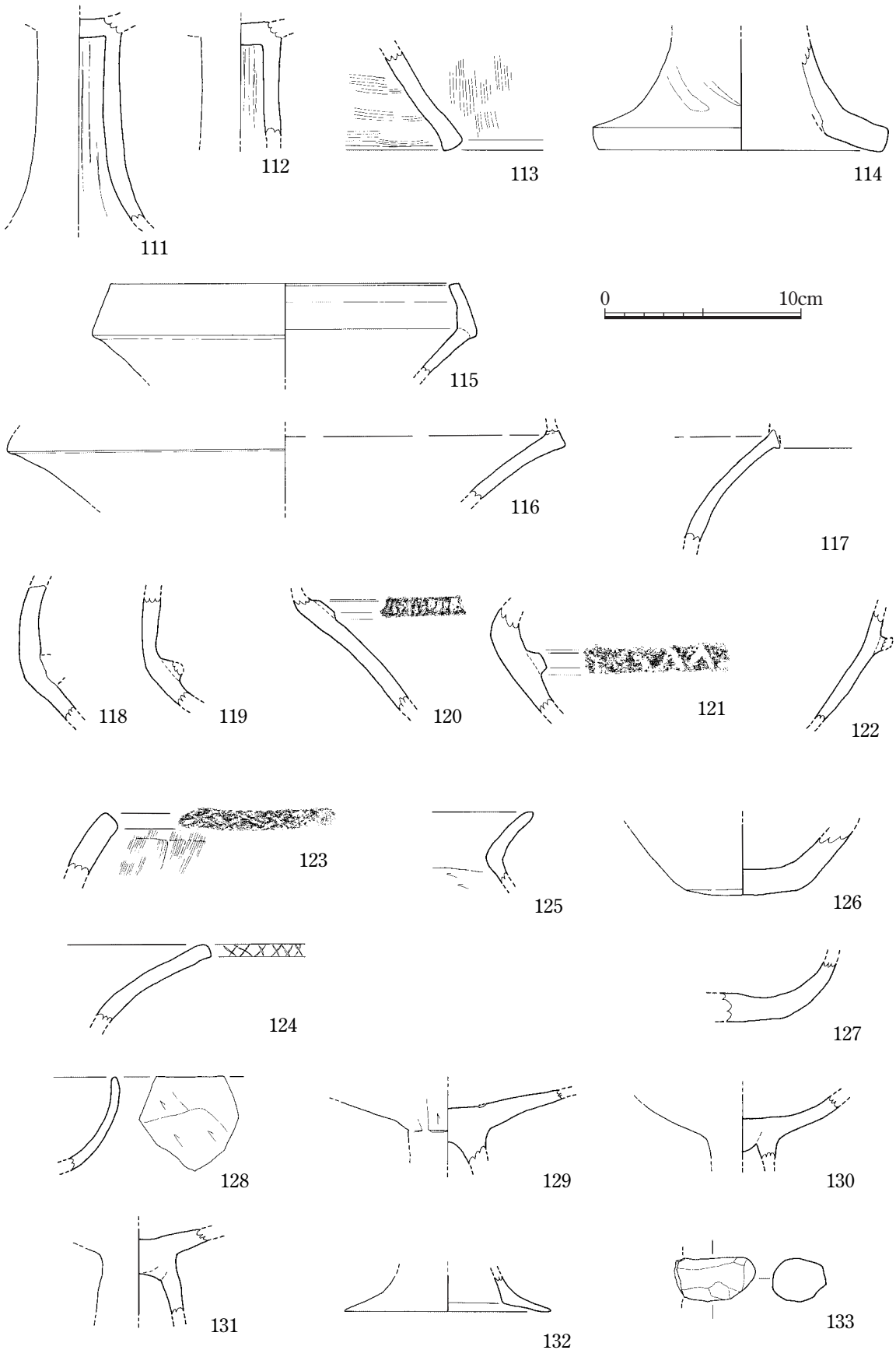


Fig.22　SX－012出土遺物Ⅰ（1/3）

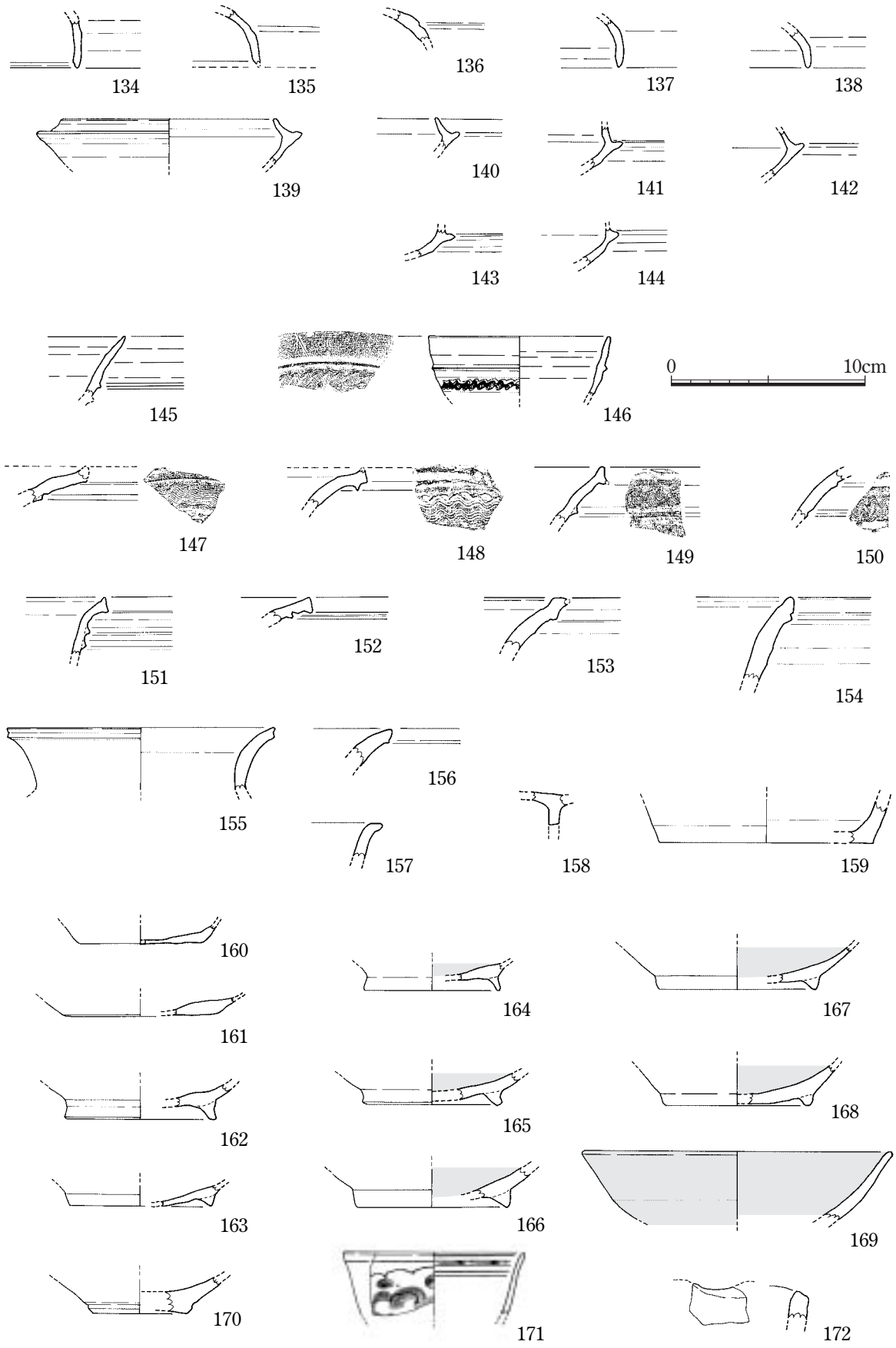


Fig.23　SX－012出土遺物Ⅱ（1/3）

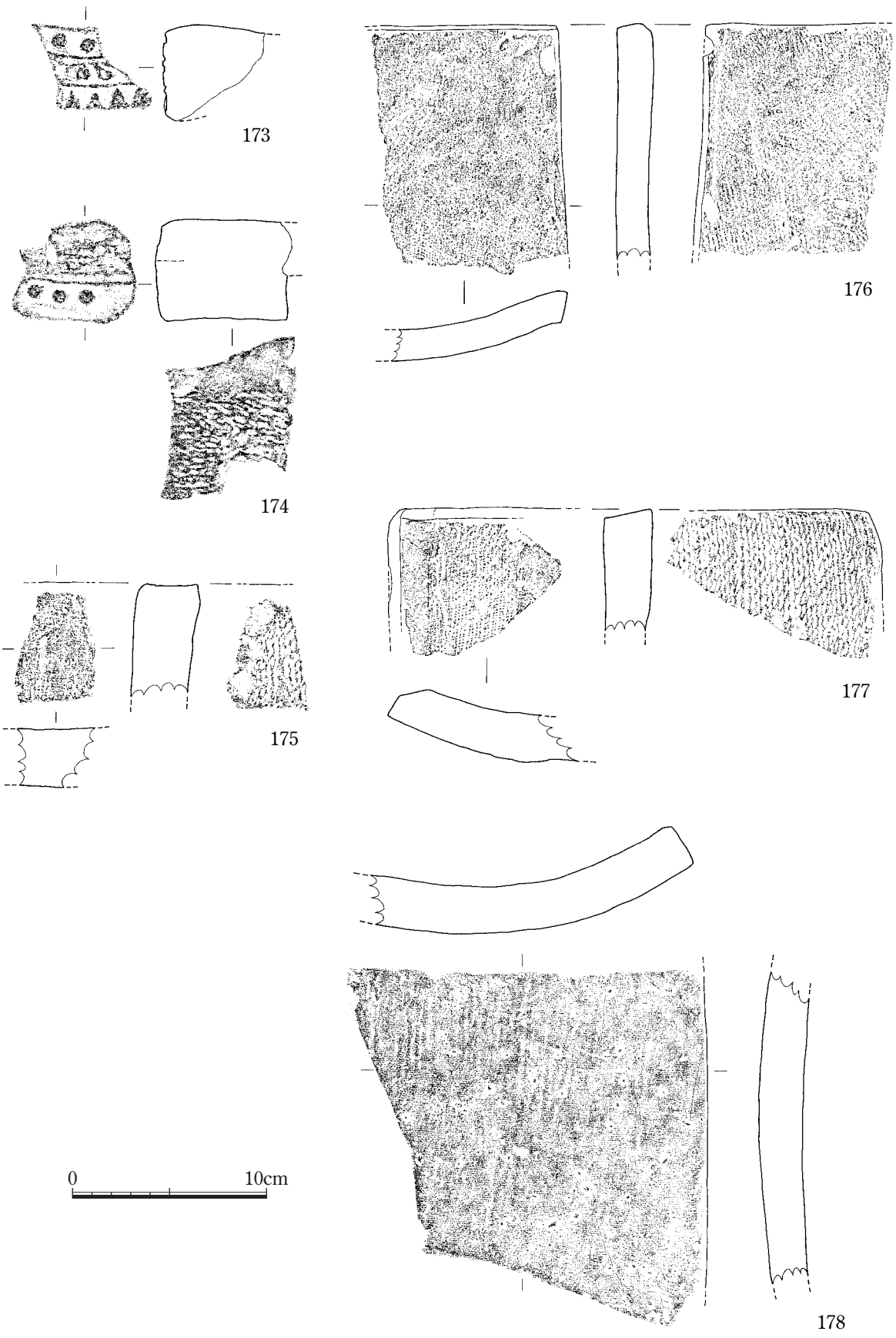


Fig.24　SX－012出土遺物Ⅲ（1/3）

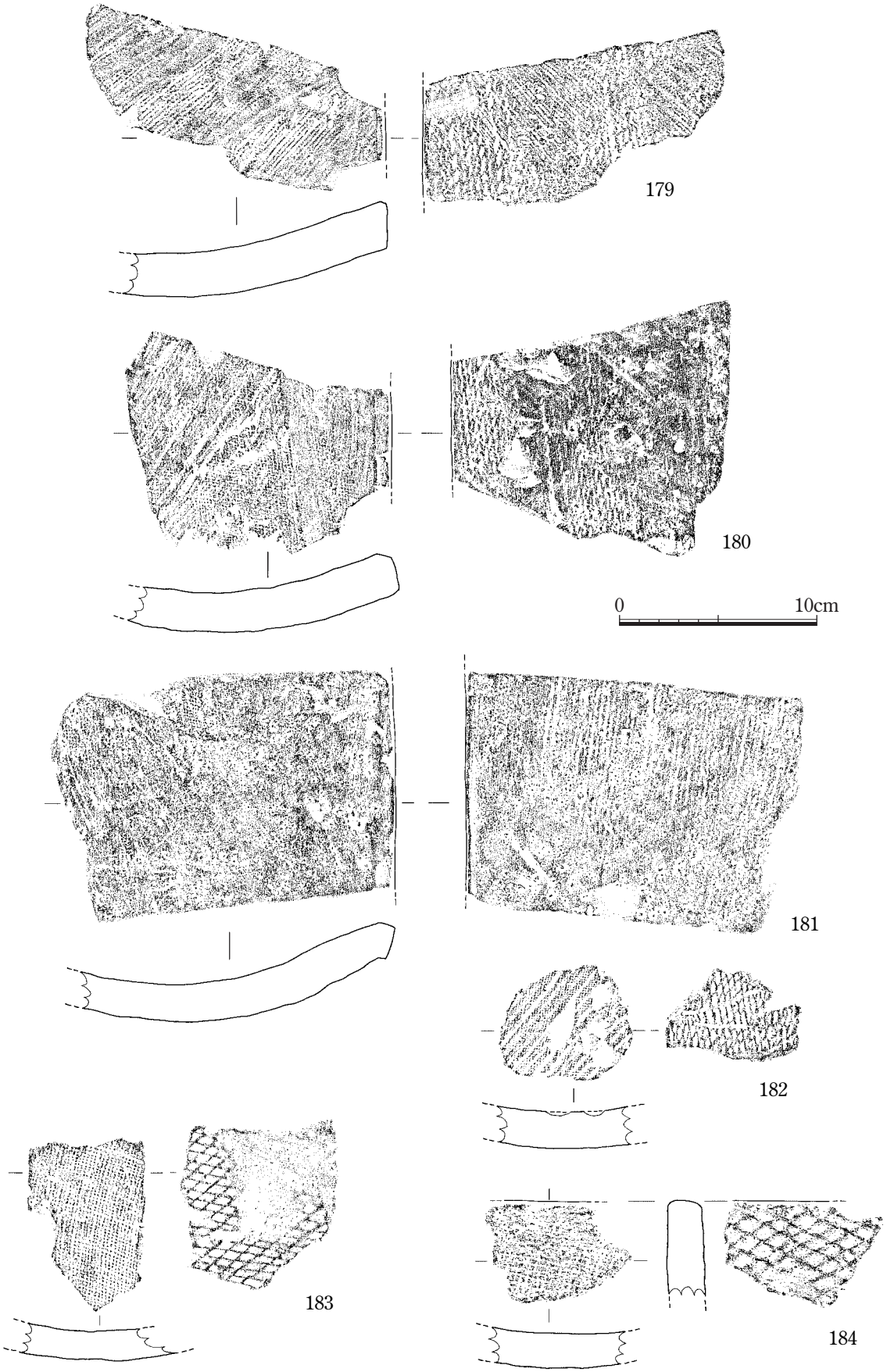


Fig.25　SX－012出土遺物Ⅳ（1/3）

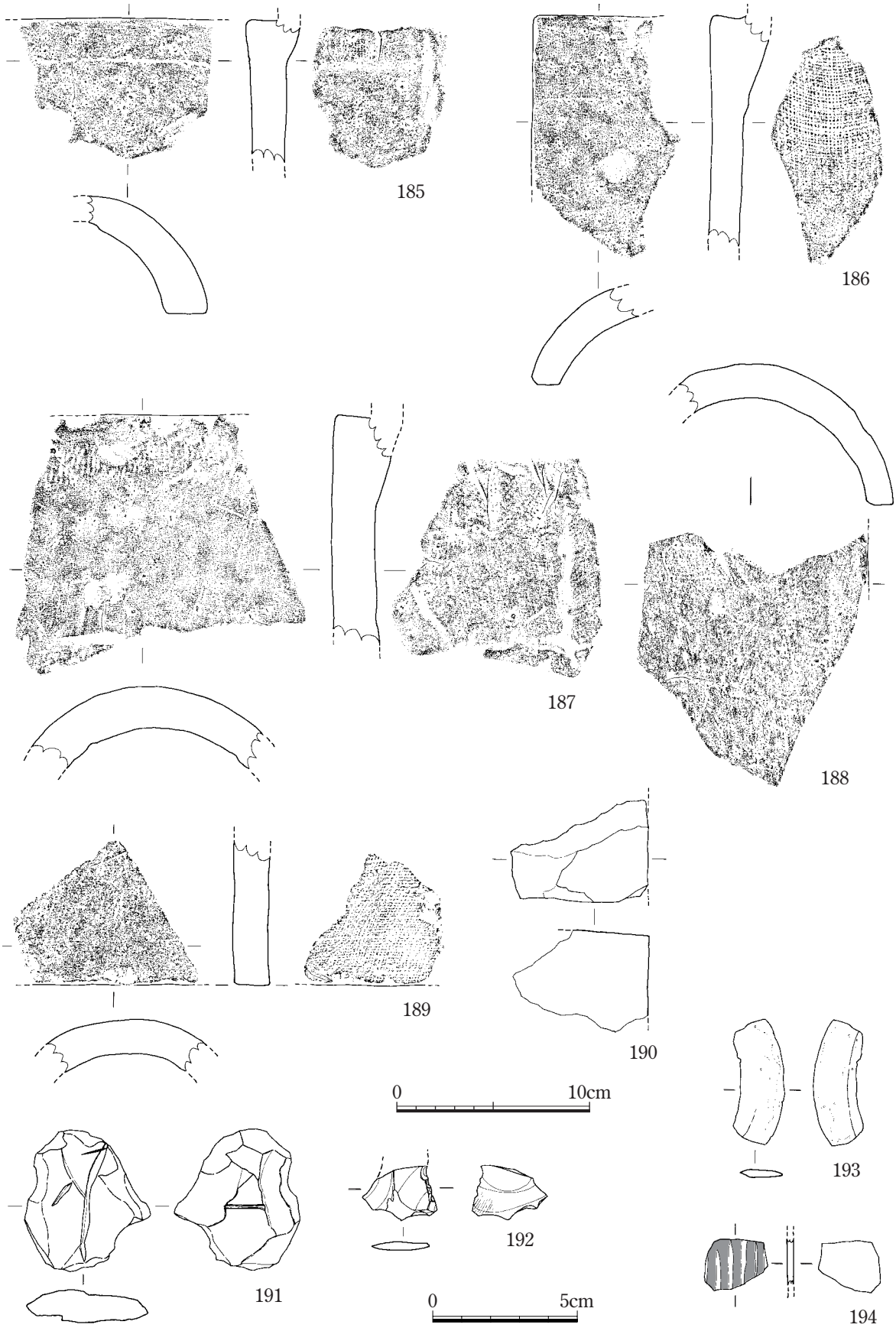


Fig.26　SX－012出土遺物Ⅴ（191～194は1/2、他は1/3）

歯文を配する。土師質で焼成不良。174は摩滅が著しく不明瞭であるが、外区下縁に珠文を配す。段顎で下面に縄目叩き痕が残る。土師質で焼成不良。175～184は平瓦で、175～182は凸面に縄目叩きを、183・184は格子叩きを施す。格子叩きは183は目が細かく、184はやや大きめである。凹面は布目圧痕が残る。176・179・180は板状工具で粗くかきナデた痕跡がある。側面はいずれも面取りを受けている。175～177・179は須恵質、他は土師質の焼成である。185～189は丸瓦で、188・189を除き玉縁付近の破片である。いずれもローリングを受けているが、器面の残っているものでは凸面に縄目叩き痕が残り、凹面には布目痕が残る。185は外面に細い沈線が巡るが製作時のものかどうか不明。焼成はいずれも土師質。190は塼である。表面はナデ調整で、焼成は赤焼けの須恵質を呈する。

191は滑石で、表裏に刃物で付けたような傷が数カ所認められる。製品に加工する前に捨てられた原石か。図化していないが他にも無加工の滑石片が数点ある。192は黒曜石の剝片で、右側縁に使用痕がある。上端は折れている。パティナが著しい。193は銅製品である。平面が弧状を呈する薄い板状のもので、用途は不明。194は骨製品か。薄い板状に削ったものに黒褐色顔料で装飾を施す。193・194は中層から出土しており、近世に下る可能性もあろう。

第三章　おわりに

今回の調査で検出した遺構は、以下の通りである。

Ⅰ区：弥生時代後期のピット

　　中世前半期の溝（SD－001・003・004）

Ⅱ区：弥生時代後期末の溝（SD－030）

　　古墳時代中期（5世紀後半）の竪穴住居跡（SC－011・032？）、井戸（SE－029）、土坑（SK－020）

　　古墳時代（詳細時期不明）の土坑（SK－013）

　　古代の遺物包含層（SX－012）

上記のうち、第18次調査検出遺構と連続する遺構が複数有り、

　Ⅰ区SD－01は第18次調査のSD－004（中世前半～近代）

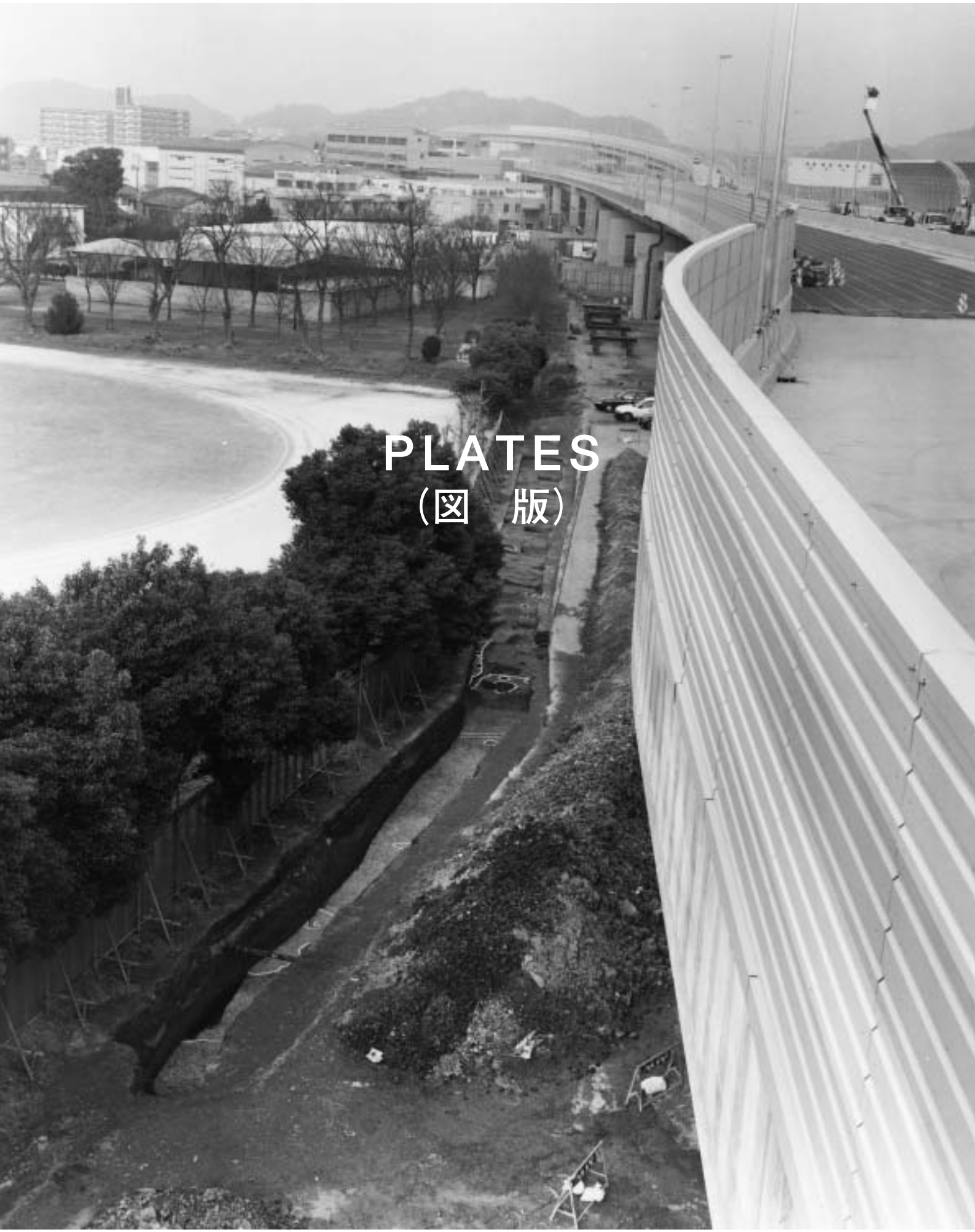
　Ⅰ区SD－003は同じくSD－005、SD－004は同じくSD－006（ともに12世紀中頃～13世紀代）

　Ⅱ区SD－030は同じくSD－031（弥生時代後期末）

に対応し、また時期的にも括弧内のように位置づけられる。竪穴住居跡と井戸、土坑についても、第18次調査Ⅱ・Ⅲ区で多数が確認されており、古墳時代中期の集落が更に北へ広がることを確認したと言えよう。SC－011は極めて残りの悪い住居であったが、壁に沿って幅広の溝が巡り、住居コーナーから屋外へと溝が出て行く。構造的に排水を意図したようにも思えるが、その底面は工具の痕跡も荒々しく凹凸をなしており、排水には不適と考えられる。全掘していないため確証はないが、溝を板等で覆った暖房用施設ではなかったかと調査担当者は考えている。

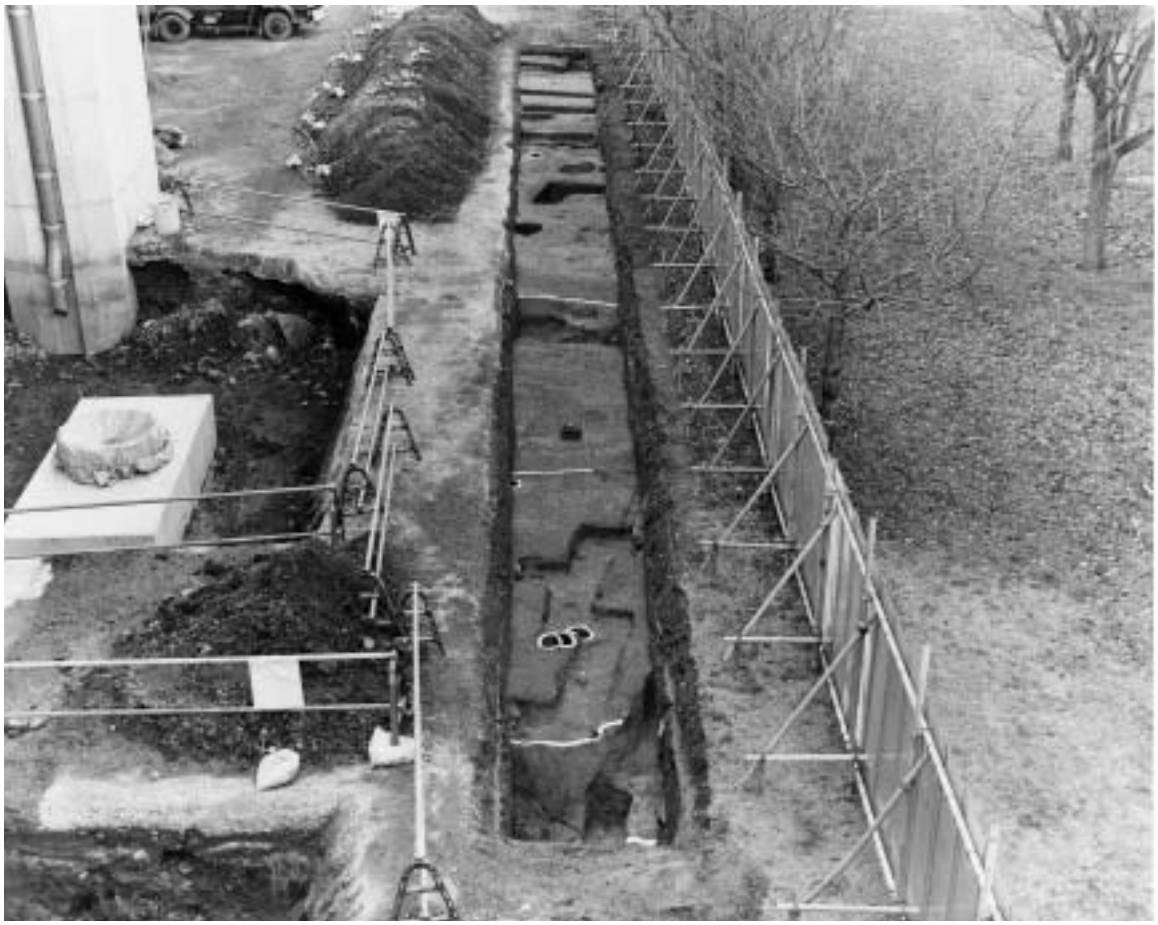
出土した遺物のうち特徴的なものとして、半島系軟質土器の外耳（Fig.18－103）、初期須恵器（Fig.10－19、Fig.23－145～150）、装飾を施した滑石製紡錘車（Fig.10－21）等があるが、第18次でも縄蓆文叩きの陶質土器や初期須恵器が出土し、古墳時代中期の臼玉を主とする滑石製品の工房跡を確認しており、今回の調査は第18次調査の追確認に終始した感が強い。また、東側のⅠ区のみならず、西側のⅡ区谷部でも瓦当を始めとする瓦塼類が出土することから、丘陵全域に古代の官衙的施設が広がっていた可能性が強い。

PLATES
（図　版）



Ⅱ区から都市高速道路月隈ＪＣＴ方面を望む（南西から）

1．第19次調査区全景（手前がⅠ区、北東から）

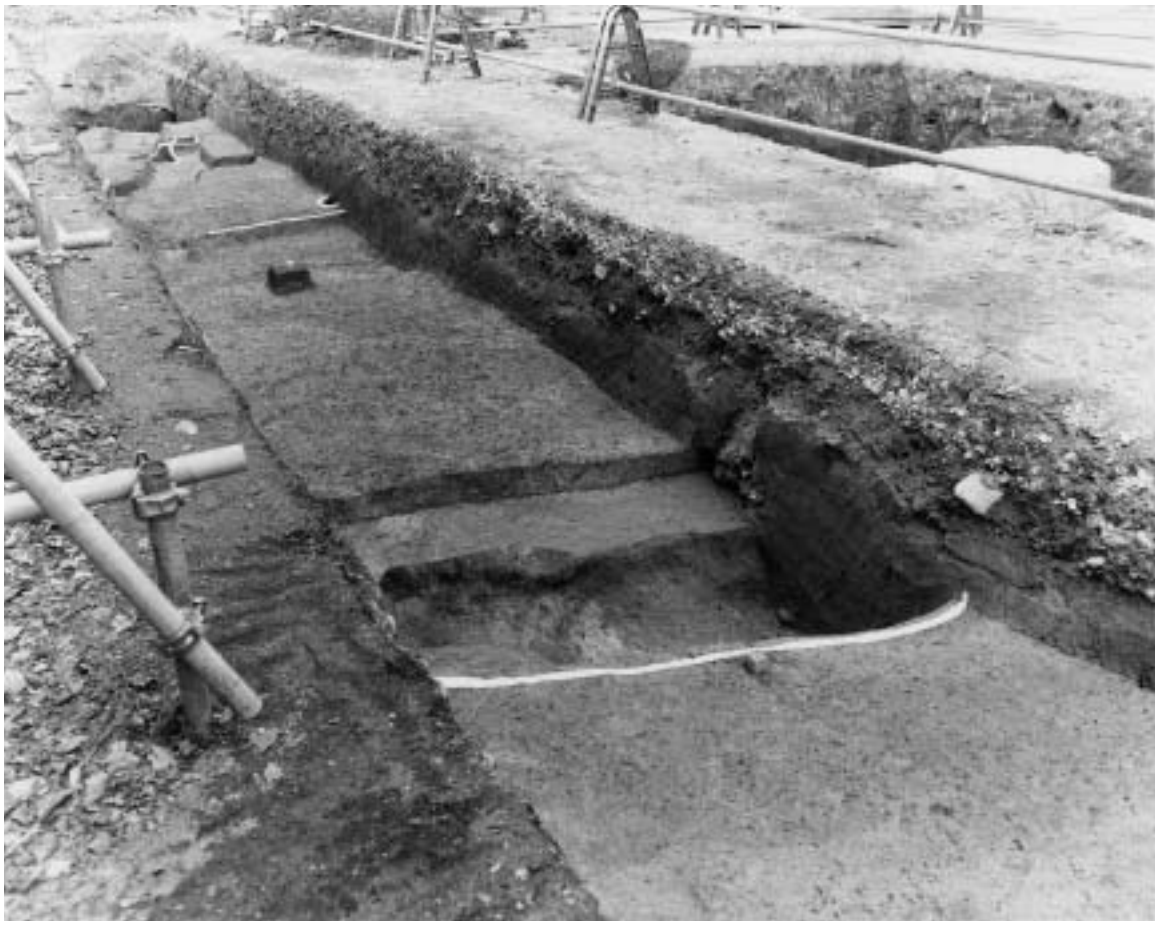


2．Ⅰ区全景（北東から）

PL.2

1．Ⅰ区全景（南西から）

2．SD－001（北西から）



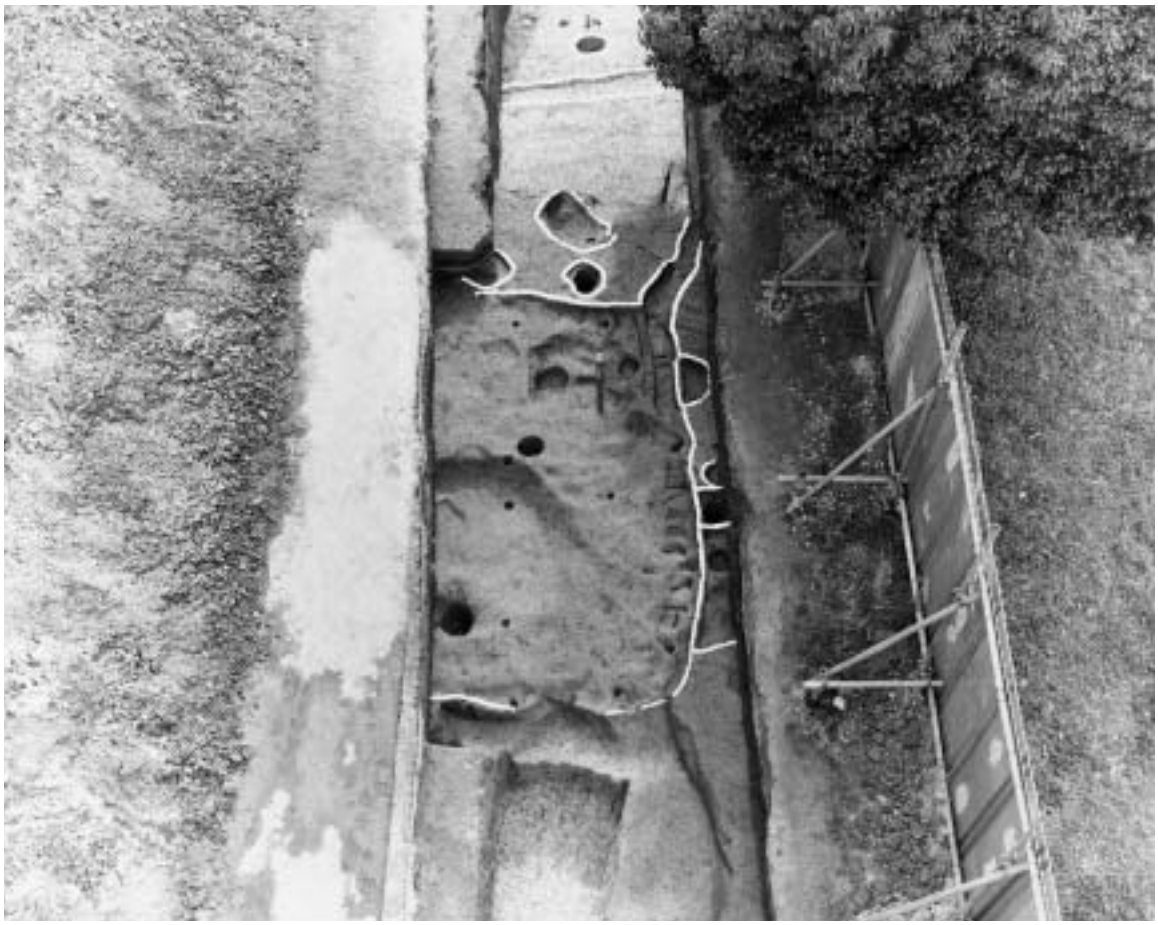
1．SD－003・004（西から）

2．SD－004（北西から）

1．Ⅱ区全景（北東から）

2．Ⅱ区全景（南西から）

1．SC－011遺物出土状況（北から）



2．SC－011完掘後（北東から）

1．SC－011遺物出土状況（東から）

2．SC－011遺物出土状況（南から）

3．SC－011遺物出土状況（南西から）

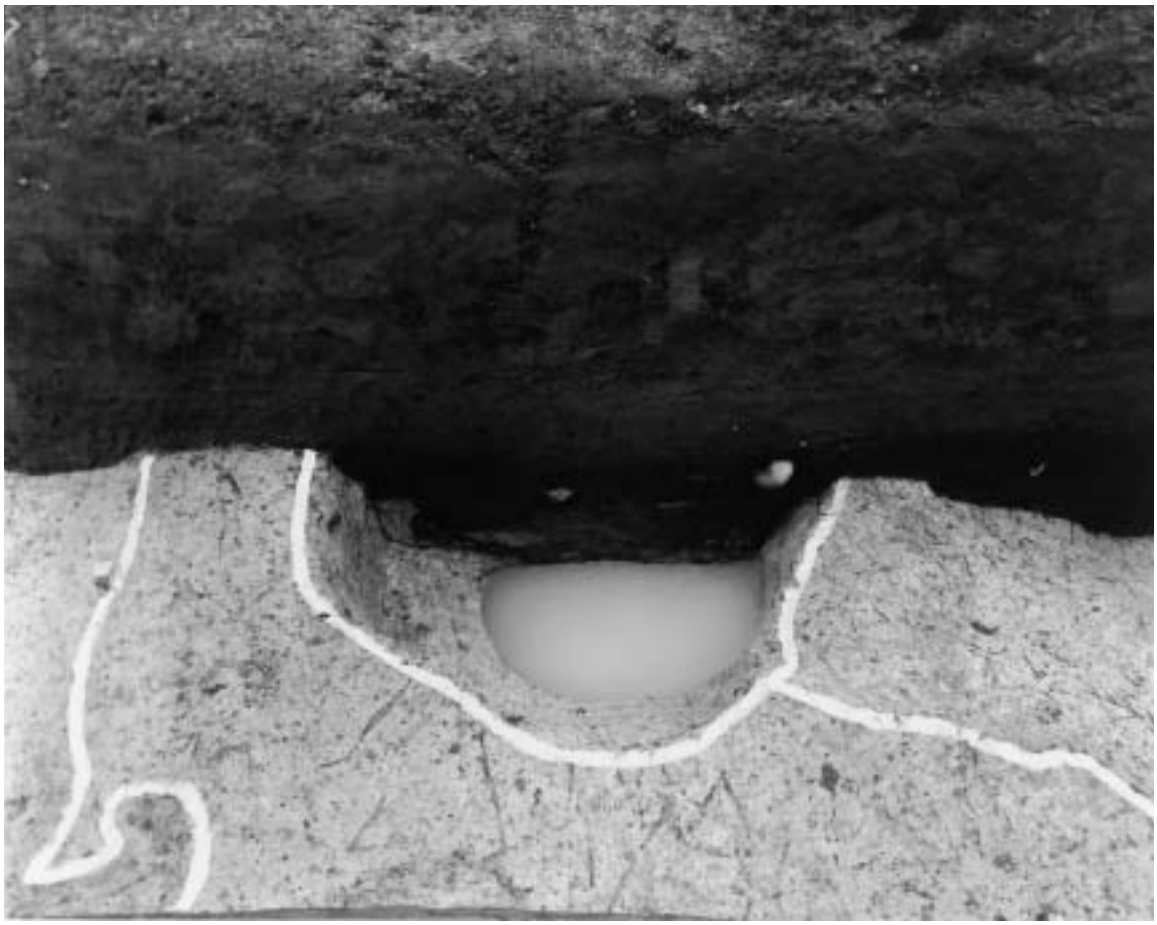
4．SC－011遺物出土状況（北西から）

5．SC－011完掘後（北東から）

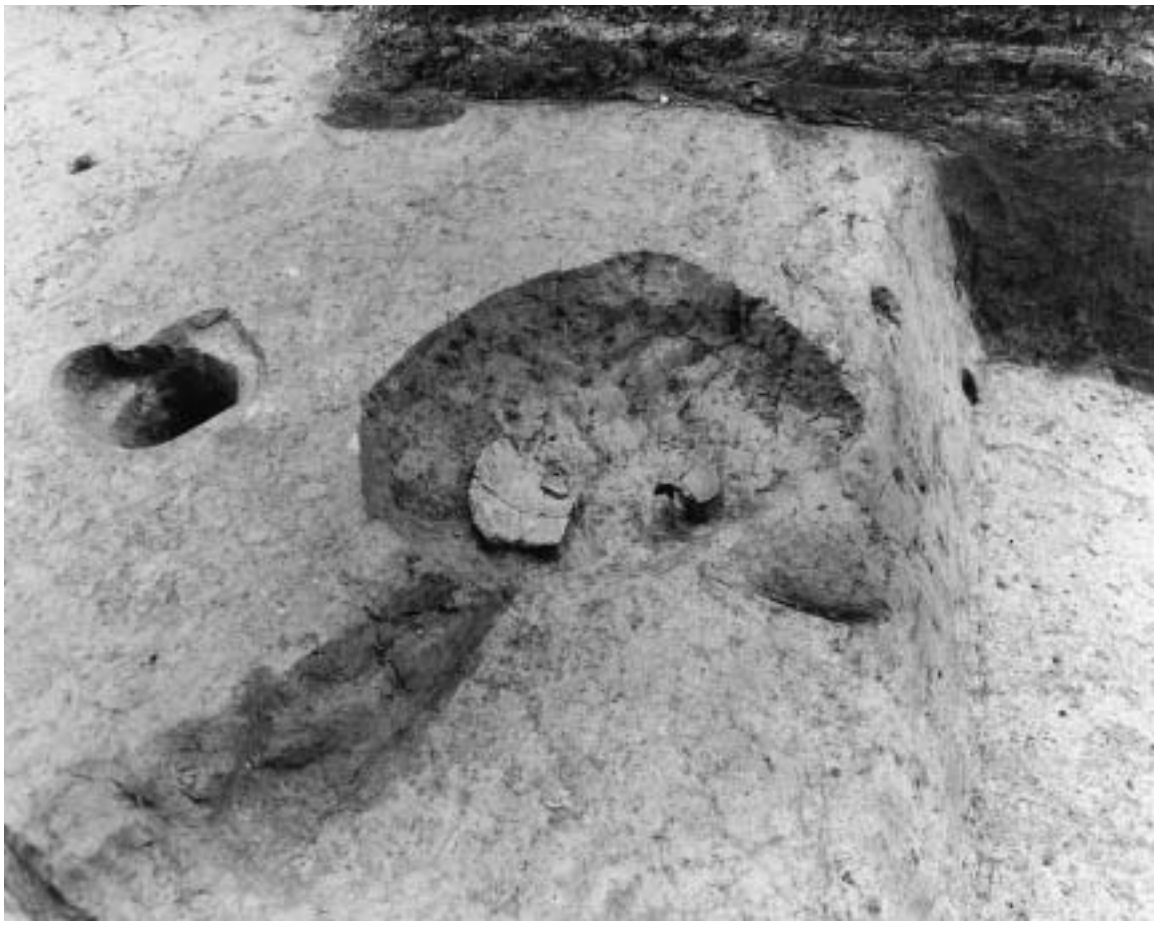
6．SC－011完掘後（南西から）

1．Ⅱ区西端部分（南西から）

2．SE－029・SD－030（北東から）



1．SE－029（北西から）



2．SK－020遺物出土状況（北西から）

1．SK－013土層断面（北東から）

2．SK－013完掘後（北東から）

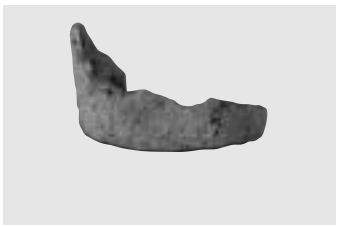
PL.10

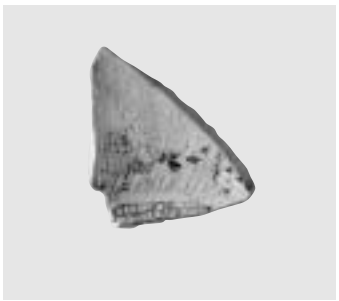
14

19

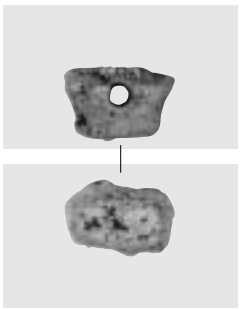
21

25


28

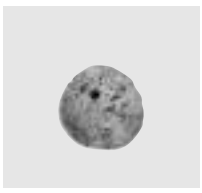

39

91


103

94

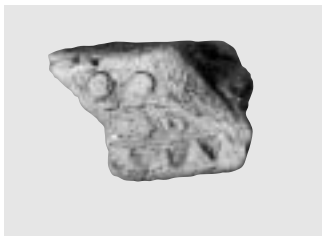
97

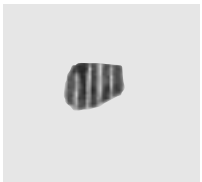

104

109

146

193


173


194

出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たかばたけいせき　ーだい19じちょうさほうこくー
書 名	高畑遺跡　ー第19次調査報告ー
副 書 名	外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書
巻 次	22
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第799集
編 著 者 名	吉武　学
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８－１　　電話番号　092-711-4667
発 行 年 月 日	2004年３月12日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
高畑遺跡第19次	福岡市 博多区板付 ６丁目地内	40132	0095	世界測地系 33°33′31″ 日本測地系 33°33′19″	世界測地系 130°27′25″ 日本測地系 130°27′34″	20030121 ～ 20030228	204	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高畑遺跡第19次	集落、 水田？	弥生 古墳 古代 中世	弥生ー溝、 古墳ー竪穴住居跡・ 井戸・土坑、 古代ー包含層、 中世ー溝	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦、紡錘車	第18次調査地点に北隣し、 その調査成果を追認した。

外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書22

高畑遺跡

ー第19次調査報告ー

福岡市埋蔵文化財調査報告書第799集

2004年（平成16年）３月12日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印　刷　正光印刷株式会社
福岡市西区周船寺３丁目28－１